

稲荷山館跡・堤屋敷遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第156集



2006

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



い な り や ま た て つ つ み や し き
稲荷山館跡・堤屋敷遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第156集

平成18年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、稲荷山館跡・堤屋敷遺跡の調査成果をまとめたものです。

稲荷山館跡・堤屋敷遺跡は、山形県東南部に位置する米沢市に所在します。米沢市では現在670箇所を越える埋蔵文化財包蔵地が登録されており、縄文・弥生・古墳の各時代の遺跡が数多く分布しています。中・近世期においては長井氏・伊達氏の領主時代を経て、上杉氏の城下町として栄えました。今でも市内各所には歴史的な地名や名所が見られ、多様な文化を育んできた地域です。現在では、山形新幹線や高速道路網の整備によって山形県の南の玄関口としての役割を果たしています。

この度、東北中央自動車道相馬尾花沢線（福島～米沢間）建設に伴い、工事に先立って稲荷山館跡・堤屋敷遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、堤屋敷遺跡においては約100基にのぼる柱穴や土坑が検出され、掘立柱建物跡1棟が確認されました。遺物は稲荷山館跡から縄文土器深鉢が出土したほか、堤屋敷遺跡からは中・近世の陶磁器片や古銭などが出土し、当該期の様相が窺われる資料となりました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの貴重な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 佐藤 敏彦

本書は、東北中央自動車道相馬尾花沢線（福島～米沢間）建設に係る「稲荷山館跡・堤屋敷遺跡」の発掘調査報告書である。

既刊の年報、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は日本道路公団東北支社の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物・調査記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺跡名	① <small>いなり やまたて</small> 稲荷山館跡 ② <small>つつみ やしき</small> 堤屋敷遺跡
遺跡番号	① 米沢市遺跡地図A-396 ② 平成16年度登録
所在地	① 山形県米沢市万世町梓山字稲荷山 ② 山形県米沢市万世町桑山字堤屋敷
調査委託者	日本道路公団（現：東日本高速道路株式会社）東北支社
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター 理事長 佐藤敏彦
受託期間	平成17年4月1日～平成17年3月31日
現地調査	① 平成17年8月22日～平成17年10月19日 ② 平成17年10月5日～平成17年11月18日
調査担当	調査第一課長 野尻 侃 主任調査研究員 須賀井 新人（調査主任） 調査員 山木 巧
調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室
調査協力	日本道路公団東北支社山形工事事務所 山形県教育委員会置賜教育事務所 米沢市教育委員会

凡 例

- 1 本書の作成は須賀井新人・山木 巧が担当し、執筆は第Ⅰ章1、第Ⅲ章1・3、第Ⅳ章1・3、第Ⅴ章を須賀井が、第Ⅰ章2、第Ⅱ章、第Ⅲ章2、第Ⅳ章2を山木が各々分担した。
- 2 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（測地成果2000）により、高さは海拔高で表す。また、方位は座標北を示す。
- 3 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。
SB…………掘立柱建物跡 SK…………土 坑 SP…………柱 穴
S ……………礫 W…………木
- 4 土層観察においては、基本層序をローマ数字で、遺構覆土を算用数字で表している。
- 5 土器の拓影の内、表裏を表したものについては、断面図をはさんで右が表面、左が裏面として図を作成した。
- 6 遺構・遺物実測図の縮尺、網点の用法は各図に示した。
- 7 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。
- 8 発掘調査および本書を作成するにあたり、岩田 隆氏・河村健史氏(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)の両名からご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。
- 9 委託業務は下記のとおりである。
基準点測量委託業務 株式会社ケンコン

目 次

I	調査の経緯	
	1 調査に至る経過	1
	2 発掘調査の方法と経過	1
II	遺跡の立地と環境	
	1 地理的環境	4
	2 歴史的環境	4
III	稲荷山館跡	
	1 遺跡の概要	8
	2 検出遺構	8
	3 出土遺物	14
IV	堤屋敷遺跡	
	1 遺跡の概要	15
	2 検出遺構	15
	3 出土遺物	29
V	ま と め	
	1 稲荷山館跡	32
	2 堤屋敷遺跡	32
	報告書抄録	巻末

表

表1	調査工程表	3
----	-------	---

図 版

第1図	遺跡位置図	6	第13図	SP24～36柱穴	21
第2図	稲荷山館跡調査区概要図	9	第14図	SP38～49柱穴	22
第3図	稲荷山館跡遺構配置図	10	第15図	SP50～62柱穴	23
第4図	前期調査区東・南壁土層断面	11	第16図	SP63～74・78柱穴	24
第5図	後期調査区東・北壁土層断面	12	第17図	SP79～91柱穴	25
第6図	SK1・2土坑	13	第18図	SP92～96柱穴	26
第7図	出土遺物	14	第19図	2区遺構配置図	27
第8図	堤屋敷遺跡調査区概要図	16	第20図	2区検出土坑・柱穴	28
第9図	1区遺構配置図	17	第21図	出土遺物(1)	29
第10図	SB1掘立柱建物跡	18	第22図	出土遺物(2)	30
第11図	SP21・28・37・75・76・85柱穴	19	第23図	出土遺物(3)	31
第12図	SP11～20・22・23柱穴	20			

写真図版

写真図版1	稲荷山館跡調査区遠景ほか	写真図版9	1区完掘状況
写真図版2	SK1土層断面ほか	写真図版10	2区完掘状況
写真図版3	前・後期調査区完掘状況	写真図版11	1区柱穴群検出状況
写真図版4	出土遺物	写真図版12	SK101・102完掘状況
写真図版5	堤屋敷遺跡調査区遠景ほか	写真図版13	出土遺物(1)
写真図版6	SB1掘立柱建物跡ほか	写真図版14	出土遺物(2)
写真図版7	SP21完掘状況ほか	写真図版15	出土遺物(3)
写真図版8	SK101・102完掘状況ほか		

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

東北中央自動車道は福島県相馬市と秋田県横手市とを結ぶ高速道路網で、福島市からは国道13号と並行する縦貫道として計画されている。日本道路公団が施工する相馬・尾花沢線のうち、福島～米沢間は国と県が事業費を負担する「新直轄方式」に計画変更されて建設中である。

稲荷山館跡は米沢市遺跡地図に記載された周知の遺跡であるが、その登録は国道13号改良工事の後であった。現在の館跡は国道によって南・北側に分断され、約5mの標高差を生じている。平成8年には国道沿いに整備される貯水槽の設置に伴い、米沢市教育委員会が約70㎡を対象に発掘調査を実施し、堀跡や柱穴等が検出されている。堤屋敷遺跡は高速道路の米沢インターチェンジ建設場所に位置し、平成16年度の分布調査によって発見された遺跡である。

周知遺跡

新規発見遺跡

開発事業との調整にあたって県教育委員会では、これらの遺跡にかかる土木工事等に際しては、遺跡保存のための協議および文化財保護法に基づく手続きが必要と判断した。これを受けた日本道路公団は遺跡の取り扱いについて県教育委員会と協議を重ね、道路建設において最も先行するボックスカルバート付設範囲を対象とした発掘調査を、平成17年度に実施することで調整が図られた。

調査原因

これらの調整を受けて、発掘調査実施機関である県埋蔵文化財センターでは、調査にかかる経費積算調書を平成17年2月に道路公団東北支社に提出した。4月1日付けで「埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定」を道路公団・県教育委員会・埋蔵文化財センターの三者で締結、併せて「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を道路公団東北支社との間で締結した。続いて7月5日には、文化財保護法第92条に基づき「埋蔵文化財発掘調査の届出」を県教育委員会へ提出、同8日に「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を受け取った。

以上の諸手続きを経て、道路公団山形工事事務所や米沢市教育委員会など関係機関との事前打ち合わせ会を8月3日に開催し、調査期間や方法等の実施計画について協議、了承された。発掘調査の後には出土遺物等の整理を行って、当該年度中に報告書を刊行するものである。

2 発掘調査の方法と経過

現地調査は、平成17年8月22日から11月18までの実働56日間（稲荷山館跡28日間、堤屋敷遺跡28日間）の日程で実施した。稲荷山館跡の調査区設定箇所は三方を杉林に囲まれており（南・北側は事業範囲外、西側は未買収地）、東側を周辺の宅地が生活用水として使用している沢によって区切られる。したがって、調査区外に掘削土を置くことが困難な状況であったため、調査区を二分割する方法（キャッチボール方式）を採用した。調査は南半域（前期調査区）を先行して実施し、終了後に埋め戻しを行って北半域（後期調査区）の調査に着手した。一方、堤屋敷遺跡では二箇所の調査区を設定し、東側を1区、西側を2区と呼称した。調査は双方の遺構検出状況等を把握した上で並行して進めた。

分割調査

両遺跡とも現場への器材搬入から手がけ、調査区の設定、重機による表土除去、遺構検出のための面整理・面精査と進め、遺構プランの検出後に平面図作成・遺構登録などの手順を踏んだ。また、各段階で写真撮影を行って、一連の調査作業が記録として辿れるように配慮している。以下には、発掘調査の経過についてその概要を週単位で記述する。

稲荷山館跡 調査開始

8月22日～26日(第1週):22日に現地調査を開始。器材搬入と発掘の成果と無事故を祈願しての鍬入れ式を行う。稲荷山館跡で調査区設定箇所の草刈り等の環境整備後、前期調査区(約420㎡)を設定する。試掘トレンチを設け、遺構検出までの掘り下げを実施。24日～26日まで重機による表土除去。現地は杉林であったことから、重機の進行とあわせて掘削面を傷めないように注意しながら抜根作業を行う。近世陶磁器片2点出土。

8月29日～9月2日(第2週):29日から面整理を開始し、1回目終了の時点で写真撮影を実施。西端部を除いて攪乱の様相。東壁沿いにトレンチを設定して純粋な地山層までの掘り下げに努め、一部で非プライマリーな砂層を確認。これに合わせて東半域の攪乱層を手掘りで除去したところ、旧沢筋を検出する。調査区南端では縄文土器深鉢片が一括的に出土。31日に業務委託して基準点を設置、10m単位に地区割り杭の打設。グリッド番号を付して、出土遺物を包含層扱いで順次取り上げる。

9月5日～9日(第3週):粗掘りと面整理を繰り返して、東半域の掘り下げ終了。黒色土との互層で堆積していることから、地形的な鞍部と判明。各所にサブトレンチを設定して面精査をするが、遺構・遺物の検出なし。調査区西側で近世の廃棄穴2基を検出。調査区東・南壁面にて土層堆積状況の断面実測・写真撮影等記録作業を行なう。

前期調査終了

9月12日～16日(第4週):廃棄穴2基の掘り下げを実施。併せて、平板測量による調査区平面図の作成にかかる。13日に完掘状況の写真撮影を経て調査終了。14～15日にかけて重機を導入しての埋め戻し作業。完了後に後期調査区(約300㎡)を設定し、重機による表土除去を開始。併行して杉根の抜根作業を行う。

9月20日～22日(第5週):掘削面の面整理を行うが、前期調査区同様に灰黄褐色砂と黒色シルトとの互層で、検出遺構・出土遺物ともなし。

9月26日～30日(第6週):手掘りによる掘削面上の黒色土除去を終了し、調査区へのグリッド杭打設(委託業務)。28日に東・北壁沿いに土層観察用のトレンチを設定し、純粋地山面まで掘り下げる。併せて、調査区平面図・壁面土層セクション図の作成にかかる。30日に写真撮影のための面清掃後、完掘状況の写真撮影を行って稲荷山館跡の現地調査を終了する。

堤屋敷遺跡 調査開始

10月5日～6日(第7週):5日に堤屋敷遺跡の調査を開始。調査区設定の後、試掘トレンチを設定して遺構検出面の確認を行う。1区より須恵器、近世磁器片が数点出土。圃場整備により平坦化されているが、検出面までは表土下20～120cmと地点により差が大きく、旧地形にはかなりの起伏があると思われた。

10月11日～14日(第8週):11日から1区の表土除去を開始、併行して面整理を行う。表土掘削に伴い、陶磁器片、古銭(熙寧元寶)等が出土。13日に1区の表土除去終了。継続して2区の表土除去を開始。

10月17日～21日(第9週):18日に2区の表土除去終了。稲荷山館跡へ移動して後期調査区の埋め戻し。19日より1・2区の面整理を開始。1区で柱穴97基、2区で土坑・柱穴合わせて10

基検出される。遺構のマーキング後、1区・2区とも検出状況の写真撮影。21日に基準点測量と調査区のグリッド杭打設（委託業務）。

10月24日～28日（第10週）：2区検出遺構の精査を実施。並行して2区の遺構配置図・土層断面図等の記録作業にかかる。28日より2区検出遺構の完掘作業を行い、終了後に面清掃を実施して完掘状況の写真撮影。

10月31日～11月4日（第11週）：1区検出柱穴群の精査。併せて北東域鞍部の堆積層を掘り下げる。堆積層より陶磁器片などが多数出土した。2日より半截柱穴の土層断面・写真撮影等の諸記録にかかる。1区西端にて1間×4間で構成される掘立柱建物跡（SB1）を検出。

11月7日～11日（第12週）：継続して北東域鞍部の堆積層を掘り下げ。1区半截柱穴の完掘作業を開始。併行して、土層断面図・遺構配置図作成および写真撮影。9日に1区検出遺構の完掘作業終了。写真撮影に備えた面清掃を行い、完掘状況・調査区全景等の撮影。11日に事業者に対しての調査説明会を実施。同日、機材を撤収して調査終了。

現地調査終了

11月15日～18日（第13週）：堤屋敷遺跡調査区の埋め戻し作業。重機により調査範囲の整地と転圧を行い、終了後に現地引渡し。

なお、発掘調査終了後はセンター内にて出土遺物・図面等記録類の整理作業を行い、報告書を作成して当該年度に刊行した。

表1 調査工程表

稲荷山館跡	月	8月		9月				10月					
		第1週	第2週	第3週	第4週	第5週	第6週	第7週	第8週	第9週			
表土除去													
グリッド設定													
面整理・遺構検出													
遺構精査													
記録（作図・写真）													
その他（環境整備等）													
埋め戻し													

堤屋敷遺跡	月	10月				11月		
		第7週	第8週	第9週	第10週	第11週	第12週	第13週
表土除去								
グリッド設定								
面整理・遺構検出								
遺構精査								
記録（作図・写真）								
その他（環境整備等）								
埋め戻し								

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

稲荷山館跡・堤屋敷遺跡が所在する米沢市は山形県の東南端に位置し、豪士山・駒ヶ岳・栗子山といった奥羽山系の嶺々に東を限られ、磐梯朝日国立公園の一角をなす吾妻の山塊が南を画しており、東南に聳え立つ山々が福島県との境界ともなっている。

米沢盆地はこれらの山々と、西部に広がる低平な玉庭丘陵に囲まれた典型的な盆地である。したがって、気候は寒暖の差が大きい盆地性内陸型であり、年間降水量はやや少ないが冬期には降雪量が多く、市街地でも積雪量が1mを超える豪雪地帯である。

奥羽山系や吾妻山系に源を発する幾筋もの水流は、鬼面川・松川（最上川）・羽黒川・天王川（梓川）などの河川となって氾濫原を形成しつつ北流している。これら諸河川は、やがて合流し最上川となって県内を貫き、県土を潤しながら日本海へと注ぐ。

米沢盆地の南端から中央部にかけては、各々の河川により形成された緩やかな扇状地となっており、低地の占める割合が高くなっている。比較的平坦地が多いために農地が多く、森林の割合が少ないのが特徴である。また、扇状地であることから、排水状況が良好な地盤に恵まれている。

本遺跡群が所在する万世町周辺には、縄文時代の遺跡群や牛森古墳など数多くの遺跡が確認されている。周囲は八幡原や牛森原と呼ばれる原野であったが、江戸時代後期に藩政改革の一環として開拓が行われた。低地や緩傾斜の扇状地面のほとんどは農地化が進められ、自然堤防や傾斜の急な丘陵地においても、桑畑や畑地として土地利用がなされた。現在では八幡原中核工業団地の進出や、それに伴う宅地の造成などで都市化が進み、一部では切土や盛土による人工的な土地の改変が行われている。

稲荷山館跡・堤屋敷遺跡は、市街地から東南方へ約6km離れた万世地区に位置する。南側には標高502mの早坂山が聳え立ち、東部を天王川（梓川）が北流している。したがって一帯の地形は、早坂山の山麓および山腹の傾斜地と、天王川により形成された緩やかな扇状地上位面からなる。表層の地層は第四紀に形成された未固結の洪積・扇状地堆積物であり、細粒で軟質の砂・礫である。耕作土壌は腐植物を多く含有した粘質の褐色森林土壌であるが、傾斜地のため土壌浸食を受けやすく、一般的に生産力は低い。

2 歴史的環境

米沢市では670箇所を超える遺跡の存在が知られている。なかでも稲荷山館跡・堤屋敷遺跡が位置する万世町地内は密集地帯となっており、縄文時代早期から中世まで各時代の遺跡が分布している。八幡原周辺の遺跡群は、昭和50年代の道路建設や大規模な工業団地の造成に伴い発掘調査された遺跡群である。広域におよぶ調査によって、遺跡相互の立地関係や時期的変遷を窺えたことは評価できよう。

調査された遺跡の大半は縄文時代に属するものであり、なかでも大清水遺跡(20)、水神前遺跡(21)、柿の木遺跡(22)、二夕俣a遺跡(23)は、住居跡の検出や出土遺物により縄文時代早期前半から早期後半までの5期の変遷が辿れる集落跡である。梓山地区周辺では、縄文時代後期末葉から弥生時代中期初頭の土器が出土した空代遺跡(3)をはじめ、法将寺遺跡(6)や梓山a遺跡(7)などが連なっている。

縄文時代

弥生時代の遺跡は極めて少なく、縄文時代との複合遺跡として登録されるものに限られる。弥生時代清水北C遺跡(41)からは、弥生時代の墓制の一つである再葬墓が大小25基確認されており、さらに糊痕が認められる土器の出土から、当地域で稲作が行われたことを想起させる。

弥生時代

古墳時代に入ると、丘陵や山麓に大小の古墳が築造されるようになる。市街地北東部には193基の群集墳である戸塚山古墳群、北部窪田地区には東北地方でも最大級の前方後円墳である寶領塚古墳をはじめ、窪田古墳・八幡塚古墳などが点在している。比丘尼平遺跡(36)では、県内で初出となる古墳時代前期の方形周溝墓が3基検出され、近接する八幡堂遺跡(25)においても、南小泉式併行の古式土師器を伴う5世紀の方形周溝墓が5基確認されている。置賜地方は8世紀代も古墳の造成が行われた地域であり、横穴式石室を伴った古墳が多く分布している。県内最南端に位置する牛森古墳(29)は、凝灰岩と川原石の円礫でT字型に石室を構築した横穴式石室墳である。

古墳時代

奈良・平安時代の遺跡は、平野部の主要な河川に沿って広範囲に分布する様相が窺える。置賜地方は「日本書紀」持統天皇3(689)年に「陸奥国優咄曇郡」との記述が史料的に初見である。和銅5(712)年には、陸奥国の記述の中に「置賜郡」の名が見られ、陸奥国から分割して「出羽国置賜郡」になったと解釈されている。具注暦の漆紙文書や布目瓦が出土し、置賜郡衙跡と推定される大浦遺跡群、木簡・墨書土器や円面硯の出土から古代置賜六郷の一つ「広瀬郷」との見解もある笹原遺跡などが、当該期の代表として挙げられる。木和田地区に位置する竹井境a・b遺跡(42・43)は、竪穴住居跡30棟、掘立柱建物跡5棟が検出された奈良時代の集落跡である。住居跡の中には径12m前後を測る大規模なものが1棟存在し、集落首領者の家屋と推測されている。倉庫跡と考えられる掘立柱建物跡など、集落構成の一端を窺うことができる遺跡である。

古

代

中世に入ると、鎌倉期の武将大江広元の次男時広が「長井庄」の地頭として、暦仁元(1238)年、米沢に居城を構えたと伝えられるが確証はない。その後、大江氏は長井氏を称して八代約200年におよぶ支配を続けたが、天授6(1380)年に伊達宗遠の侵攻によって滅び、置賜は伊達領となった。十五代伊達晴宗が当主になって米沢に入部するまでは高畠が置賜支配の中心であり、米沢を本拠地とした伊達の治世は輝宗・政宗と続き、天正19(1591)年に豊臣秀吉により政宗が岩出山へ移封となるまでの210年間にわたった。

中

世

米沢市に存在する中世城館跡は、県内で最も多い200箇所以上とされ、木和田館跡(48)は12世紀前半と推定される県内最古の平城である。付近には金谷館跡(24)、我妻館跡(26)、原田館跡(27)などの平城が分布しており、当該地が交通の要所であったと共に、地域支配の要であったと推察されよう。稲荷山館跡の西方に位置する鷲城跡(54)は、東西700m、南北850mと置賜最大規模の山城であり、この尾根上には万世館山城(14)、早坂山館跡(53)、丸山日陰館跡(59)の山城が街道沿いに分布しているが、これら城館跡の築城者や築城時期は不明なも

中世城館



第1図 遺跡位置図 (国土地理院発行 2万5千分の1地形図「米沢東部」使用)

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	稲荷山館跡	城館跡	中世	31	牛森山古墳	古墳	古墳
2	堤屋敷	城館跡	中世	32	牛森山経塚群	塚群	中世
3	空代	集落跡	縄文	33	堂森山館	城館跡	中世
4	水窪行場	宗教遺跡	中世	34	堂森山塚a	塚	中世
5	上窪	集落跡	縄文・弥生	35	堂森山塚b	城館跡	中世
6	法将寺	集落跡	縄文	36	比丘尼平	集落跡	縄文・中世
7	梓山a	集落跡	縄文・平安	37	比丘尼平廃寺	寺院	中世
8	梓山b	集落跡	縄文	38	上谷地館	城館跡	中世
9	梓山c	集落跡	縄文	39	沼田土壇	土壇	中世
10	梓山d	集落跡	縄文	40	八幡原b	集落跡・墓跡	縄文・近世
11	町在家館	城館跡	中世	41	清水北c	集落跡・墓跡	縄文・弥生
12	松林寺館	城館跡	中世	42	竹井境a	集落跡	縄文・奈良・平安
13	梓山館	城館跡	中世	43	竹井境b	集落跡	縄文・奈良・平安
14	万世館山城	城館跡	中世	44	竹井境c	土壇	中世
15	普門寺	集落跡	縄文	45	木和田塚a	塚	中世
16	八幡原土壇群	集落跡・土壇	縄文・中世	46	木和田塚b	塚群	中世
17	原ノ上	集落跡	縄文	47	木和田塚c	塚群	中世
18	井ノ鼻	集落跡	縄文・中世	48	木和田館	城館跡	中世
19	牛森	集落跡	縄文	49	横山a	集落跡	縄文・奈良
20	大清水	集落跡	縄文	50	横山b	集落跡	縄文・奈良
21	水神前	集落跡	縄文	51	横山c	集落跡	縄文・平安
22	柿の木	集落跡	縄文	52	馬ノ越道館	城館跡	中世
23	二夕俣a	集落跡	縄文	53	早坂山館	城館跡	中世
24	金谷館	城館跡	中世	54	鷺城	城館跡	中世
25	八幡堂	集落跡・墓跡	縄文・古墳	55	早坂山a	集落跡	縄文・中世
26	我妻館跡	城館跡	中世・近世	56	早坂山b	集落跡・城館跡	縄文・中世
27	原田館	城館跡	中世	57	早坂山c	集落跡	縄文・中世
28	十文字西	集落跡	中世	58	早坂山d	集落跡	縄文・中世
29	牛森古墳	古墳	古墳	59	丸山日影館	城館跡	中世
30	牛森山南下	集落跡	平安・中世	60	三沢館	城館跡	中世

のがほとんどである。他にも比丘尼平廃寺（37）、八幡原土壇群(14)、沼田土壇（39）といった中世の寺院跡や土壇の存在が知られ、南東方の山岳地には宗教遺跡である水窪行場遺跡（4）宗教遺跡が分布する。

参考・引用文献

- 山形県 1985 『土地分類基本調査 米沢・関 国土調査』
米沢市 1997 『米沢市史 原始・古代・中世編』
山形県教育委員会 1997 『山形県中世城館遺跡調査報告書 第1集（置賜地域）』
米沢市教育委員会 1996 『遺跡詳細分布調査報告書第10集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第54集
米沢市教育委員会 1998 『米沢遺跡地図』米沢市埋蔵文化財調査報告書第60集

III 稲荷山館跡

1 遺跡の概要

館跡の現況は、方形区画と考えられる南西部に土塁と空堀が現存しており、一辺が約70m規模の片直角形態と推測されている。明治44年に空堀南西隅から外側約30m付近で、地権者が畑地耕作中に箕一杯ぐらいの埋納銭を発見したと伝えられている。また、国道付設工事の際には、建物の礎石と考えられる礫石が出土したことが知られている。本館跡は伝承によれば長井氏の家臣、熊坂利衛門の築城とされ、伊達氏の置賜侵入に際に最後まで戦ったが敗れ、廃城になったとの言い伝えがある(県教委1995)。周辺一帯には10余りの館跡や山城が点在していることから、前章でも触れたとおり古来より交通の要所であったことが窺われる。

今回の調査範囲は館跡の南辺土塁から南へ約70m離れた山麓が対象であり、県教委が16年度に行った試掘調査では遺構・遺物とも確認されなかった。外郭ではあるが館跡に関連する施設等が存在した可能性も考えられたことと、西進する高速道法線内の地下状況を確認する目的で調査を実施した。調査区は南から北へ傾斜する地形で、5m程の標高差がある。表土除去後に遺構確認面の把握と遺構検出に努めたが、黄褐色(または暗灰黄色)土と黒褐色土との互層をなし、安定した地山の検出には至らなかった。調査区壁面における土層観察では水平堆積の状況を呈しているが、面的に見て黄褐色土・黒褐色土が混在する様相から、攪乱もしくは細かい起伏があったことが想定された。前期調査区の東壁では、北側で表面の段差とともにⅢ層以下が欠落する状況から、土取りを受けたかあるいは流出したものと判断される。また、南・東壁面のⅢ層やⅦ層位において掘り込みの存在が確認されたが、平面的には不定形を呈するもので、自然地形の落ち込みと考えられた。

遺構・遺物の分布
遺構と遺物はいずれも前期調査区に分布し、北半部には確認されない。遺物の分布は遺構の存在と関連なく、主な出土地点は調査区東端の沢筋沿いであったが、縄文土器は北端部から一括的に出土している。

2 検出遺構

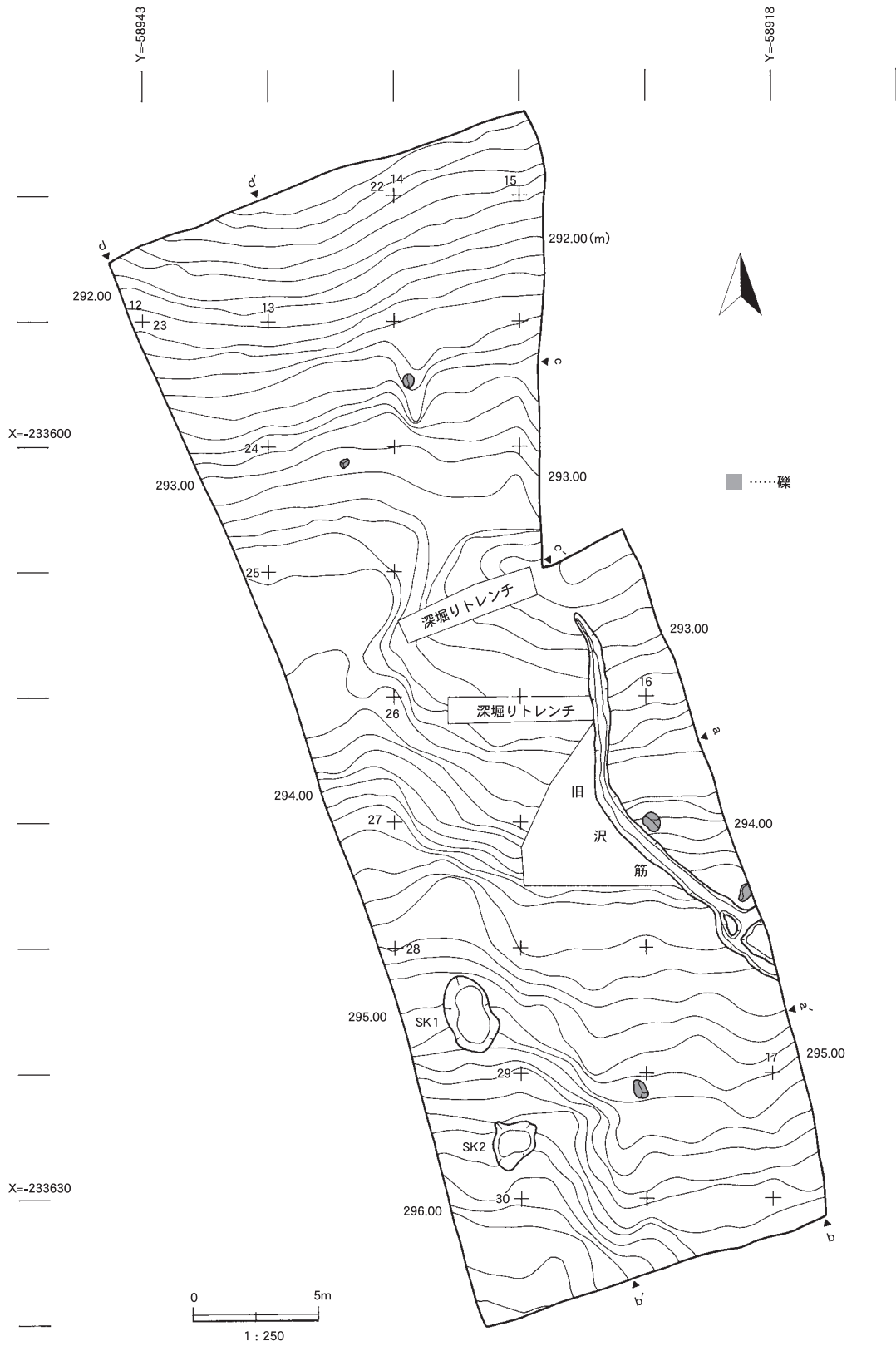
検出された遺構は、前期調査区の西半域に位置する楕円形状の土坑2基のみである。覆土に腐植途中の枝などを含んでいることから、近代に埋積したものと思われる。

SK1は28-14グリッド上で検出された大型の土坑で、平面形は南北方向に膨らむ楕円形を呈している。規模は長軸3.1m・短軸1.9m、検出面からの深さ68cmを測る。平坦な床面から立ち上がる周壁は比較的急傾で、逆台形状の断面形を呈する。覆土(F)は9層に分けることができたが、F4~9層をF3層が切って堆積する状況から、埋没後に西半域が再度掘り込まれたものと理解される。

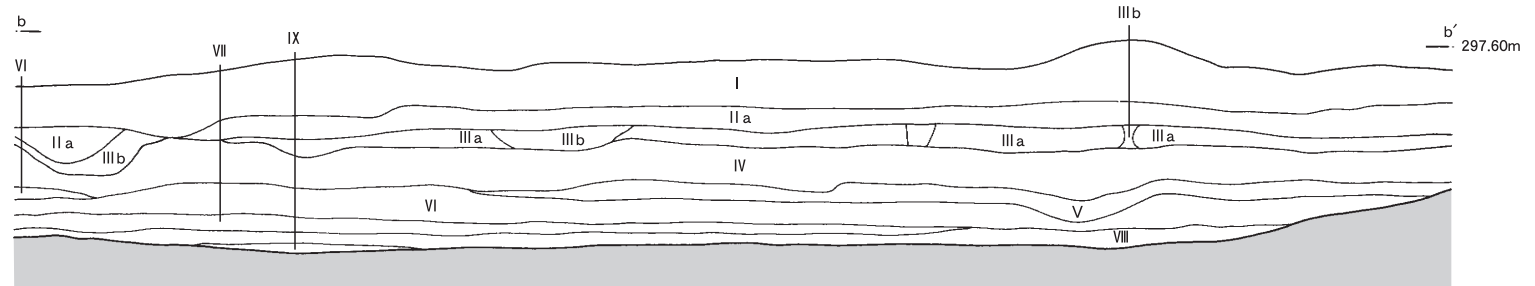
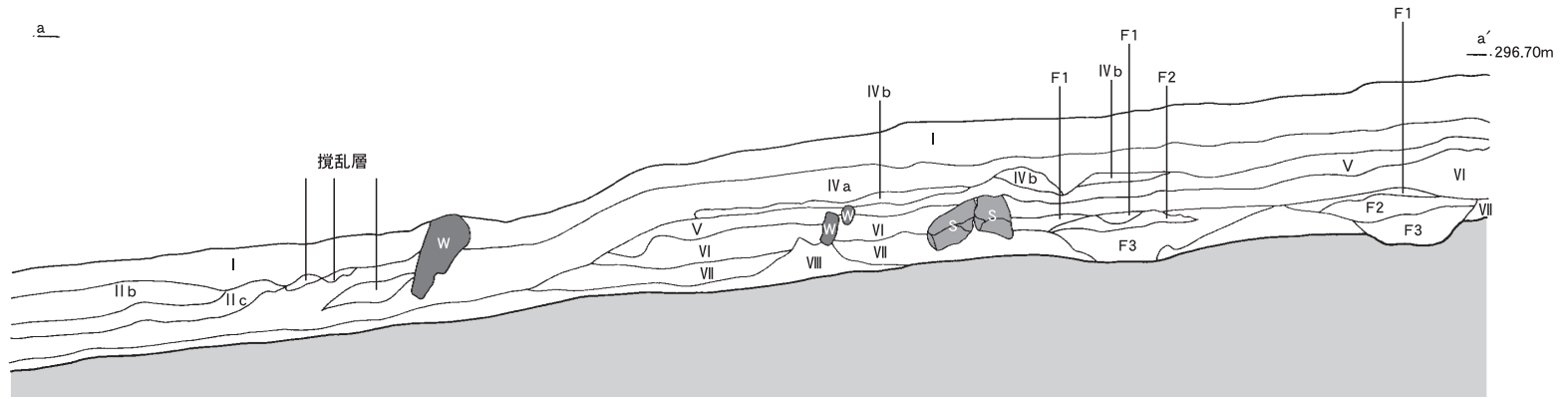
SK2は29-14・15グリッドで検出され、SK1の南東方約5mに位置する。平面形は不整な隅丸方形を呈しており、長軸2.0m・短軸1.8m、検出面からの深さ52cmの規模を測る。検出面



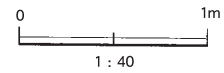
第2図 稻荷山館跡調査区概要図



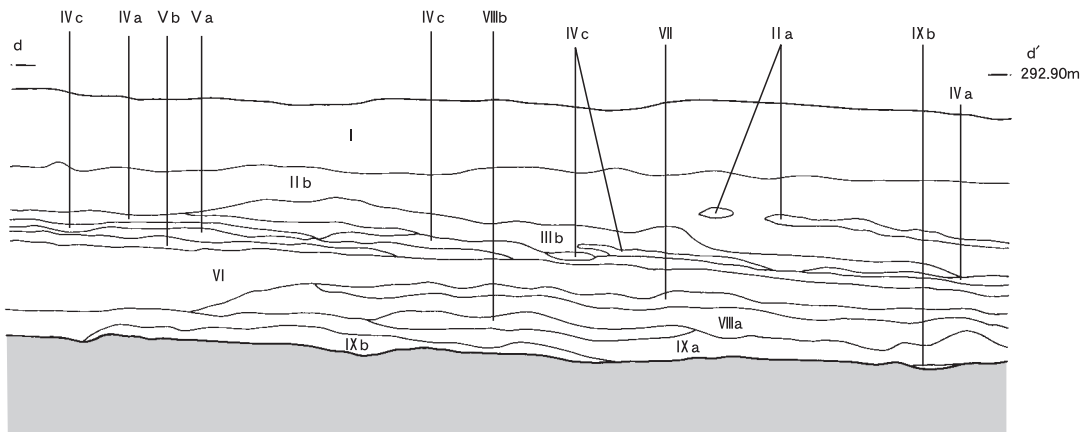
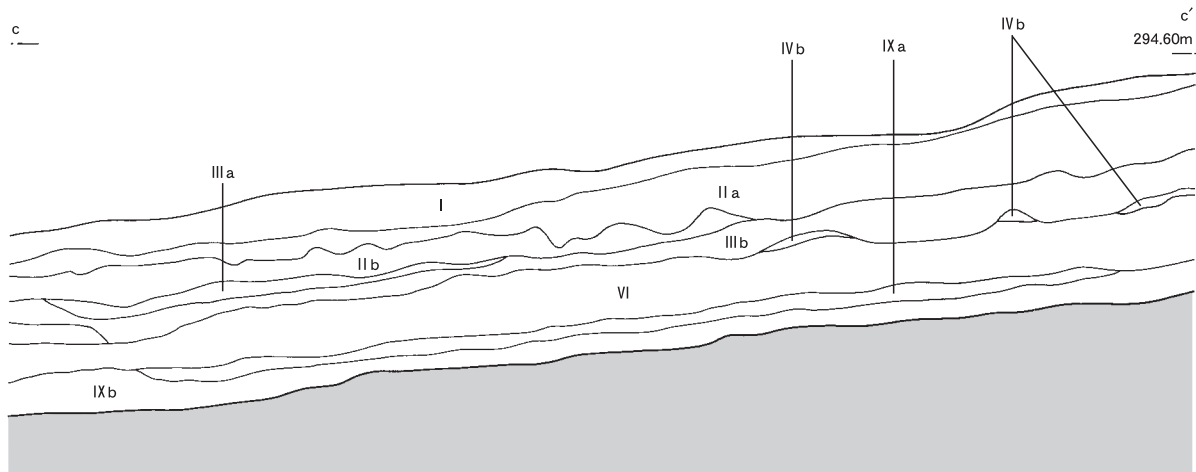
第3図 稻荷山館跡遺構配置図



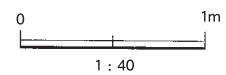
I	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	(表土)
IIa	2.5Y2/1	黒色	シルト	(しまりなし)
IIb	10YR6/6	明黄褐色	砂	
IIc	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	(やわらかく、しまりなし)
IIIa	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	(砂混じり)
IIIb	2.5Y5/2	暗灰褐色	粘土質シルト	(細砂混じり)
IVa	5Y3/2	オリーブ黒色	砂質シルト	(粗砂混じり、固くしまる)
IVb	10YR6/8	明黄褐色	砂質シルト	(固くしまる)
V	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	(細砂)
VI	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	(粗砂混じり、小礫を含む)
VII	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質	(粗砂、礫を多く含む)
VIII	2.5Y5/1	黒褐色	粘土	(粗砂混じり)
IX	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	(細砂混じり)
F1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	(河川覆土)
F2	2.5Y5/3	黄褐色	砂質	(小礫を含む、河川覆土)
F3	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	(固くしまる、河川覆土)



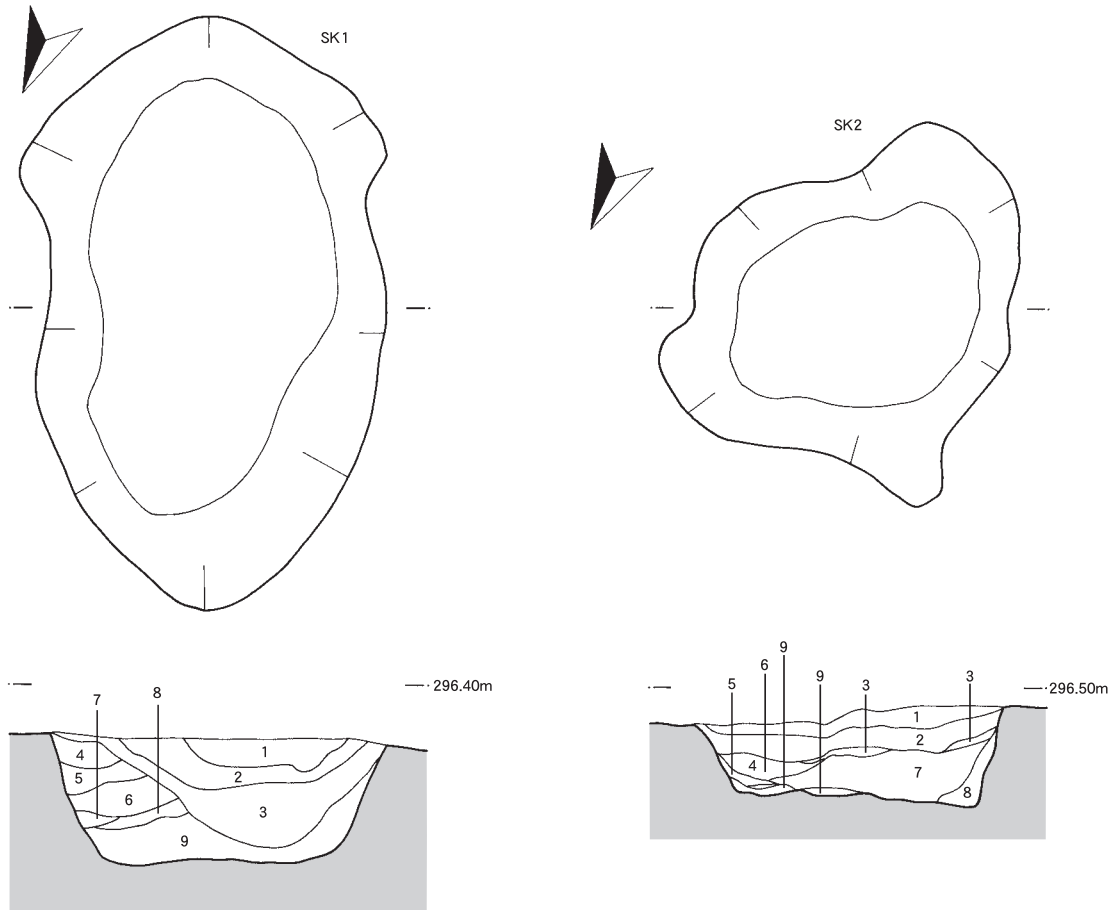
第4図 前期調査区東・南壁土層断面



I	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	(表土)
IIa	10YR4/4	褐色	砂質シルト	(粗砂混じり、しまりなし)
IIb	10YR3/1	黒褐色	シルト	(固くしまる)
IIIa	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	(酸化鉄分を含む、固くしまる)
IIIb	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	(固くしまる)
IVa	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	(しまりなし)
IVb	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	(粗砂を微量に含む)
IVc	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	(固くしまる)
Va	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	(しまりなし)
Vb	10YR4/2	灰黄褐色	砂	
VI	2.5Y3/1	黒褐色	粘土質シルト	(礫を多く含む)
VII	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	(細砂混じり、しまりなし)
VIIIa	10YR3/1	黒褐色	粘土	(砂混じり)
VIIIb	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	(礫を多く含む)
IXa	10YR4/4	にぶい黄褐色	砂	(固くしまる)
IXb	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘土質シルト	(固くしまる、地山)



第5図 後期調査区東・北壁土層断面

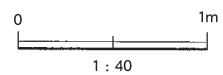


SK1

1	2.5YR3/2	黒褐色	粘土	(しまっている、粗砂混じり)
2	10YR3/1	黒褐色	粘土	(しまっている、10YR4/4 褐色シルトを斑紋状に含む)
3	7.5YR2/1	黒褐色	シルト	(やわらかく、しまっている)
4	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	(粗砂混じり)
5	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	(粗砂混じり)
6	10YR4/4	褐色	砂	(粗砂混じり)
7	10YR4/6	褐色	砂質シルト	
8	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	(粗砂混じり、固くしまる)
9	10YR3/1	黒色	粘土質シルト	(粘性中)

SK2

1	2.5YR3/2	黒褐色	粘土	(粗砂混じり、しまっている粗砂混じり)
2	10YR3/2	黒褐色	粘土	(しまっている、10YR4/4 褐色シルトを10%含む)
3	7.5YR2/1	黒褐色	シルト	(やわらかい、腐葉土・植物遺体を多く含む)
4	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	(2層をブロック状に含む、固くしまる)
5	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	(やわらかい、4を斑紋状に20%含む)
6	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	(10YR2/1 黒色粘土をブロック状に含む)
7	10YR3/2	黒褐色	粘土	(粗砂混じり、植物遺体・腐葉土多く含む)
8	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	(粗砂混じり)
9	10YR3/3	暗褐色	砂	(5Y4/2 灰黄色粘土をブロック状に含む)



第6図 SK1・2土坑

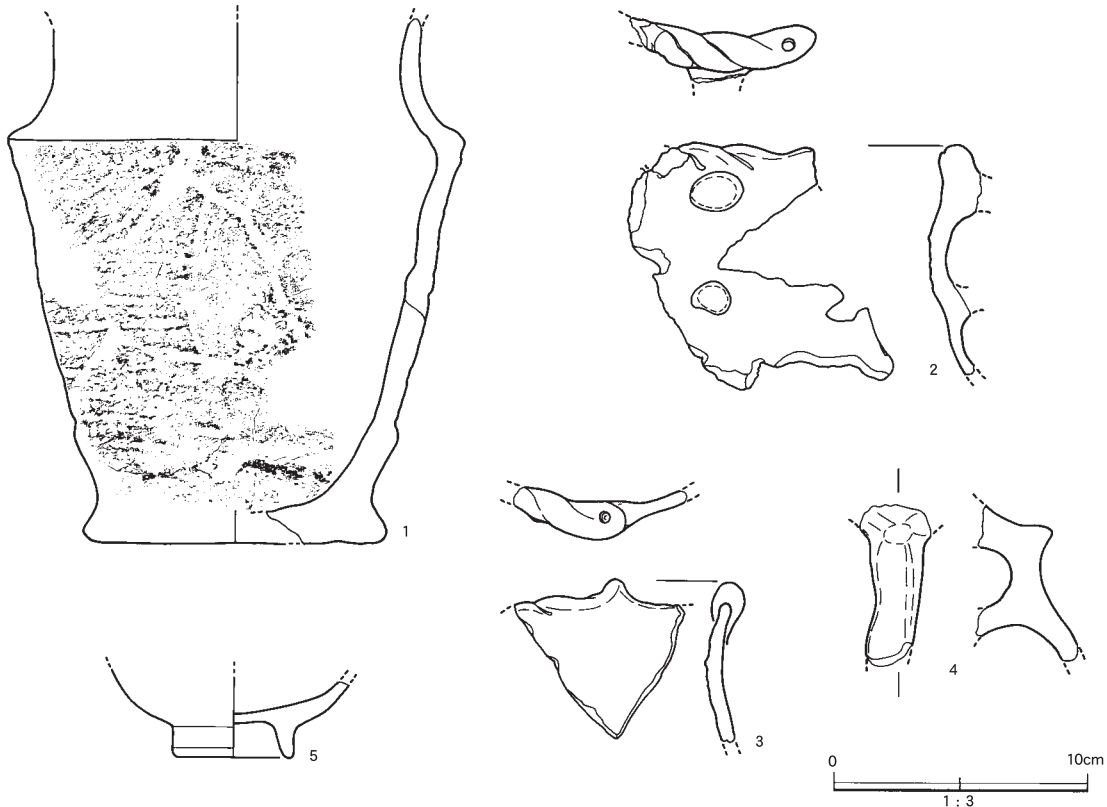
上端に見られる不整な凸部は、埋没段階で崩落したことによる形状と考えられる。やや急傾な掘り方で底面に至り、底面には所々に凹凸が見られる。覆土は9層からなる自然堆積層で、西壁際に堆積するF 8層は地山の崩落土である。F 3および7層は腐植層であり、未分解の植物遺体が多く認められた。

3 出土遺物

遺物には近世陶器2点と一括出土した縄文土器のほか土師器の細片があり、すべて南半の前期調査区から出土している。

第7図1～4の縄文土器は、14-25グリッドにてⅡ・Ⅲ層の境界付近から出土した資料である。1は口縁部を欠くがほぼ全形を窺える深鉢で、肩部が「く」の字状に強く屈曲して口縁に至る形態が特徴的である。口縁は外反して開く形状と認識される。底辺は立ち上がって直ぐに絞られるため、底縁が外側へ大きく張り出す器形となる。底辺には山形の低い隆帯を一条廻らすが、他に地文以外の文様は施されない。胴部の地文は肩部直下から隆帯までの間に施される。2・3は口辺部資料で、口縁形態は小突起を有し、口唇を肥厚させて撚糸状のねじりが表現される。口唇や突起部に4～5mm径の盲孔が認められる。4は橋状把手で、2にその剥離痕があるが、この部位に合致するものではなかった。これら縄文土器の年代は後期前葉、関東南境式土器の堀之内式に併行する南境式に属すと考えられる。

5は沢筋沿いの16-27グリッドから出土した唐津焼の片口鉢かと思される下半部で、肥前V期に併行すると思われる。



第7図 出土遺物

IV 堤屋敷遺跡

1 遺跡の概要

稲荷山館跡の東方約500mに位置し、遺跡の範囲は東西約220m・南北約80mと大きく括られている。現在は圃場整備により平坦化されているが、それ以前の地形により範囲内は幾つかの遺跡に分割されるものと思われる。今後の用地買収に伴う試掘調査の進展により、その様相が明らかになると期待される。遺跡内の現在の標高は277m～280m前後を測り、南から北へ低くなる。

ボックスカルバート設置場所を対象にした2箇所の調査区は、遺跡範囲の東半に位置する。圃場整備の際に高地の削平と低地への盛土工により、現況は平坦化された棚田状の水田となっている。16年度の試掘調査は1区近辺について行われ、数基の柱穴と溝跡が検出されたが、遺物は出土していない。よって、その時期は明確にできなかったようだが、柱穴の検出状況や土色、また「堤屋敷」という字名等から推察して中世の城館跡とされた遺跡である。

中世城館跡

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟・柱穴104基・土坑3基などである。これらは1区南西域を中心にして分布する傾向が窺われ、旧来の地形的要因に基づいた配置とみなされる。2区では土坑3基のほか数基の柱穴が認められたが、概して希薄で点在する分布状況が看取される。遺構は検出面が低い西半部で確認されており、東半域は削平が著しいことから旧来は微高地を形成していたものと理解される。

遺構の分布

出土した遺物は近世陶磁器が主で、他に中世陶器・古銭・石鏃や、柱穴内に根固め石として置かれた石臼の転用品などがある。これらは遺構の分布同様にその大半が1区から出土しているが、遺構に伴うものは上記の石臼のみで、大方は北東域に存在する谷状鞍部の堆積層から得られたものである。

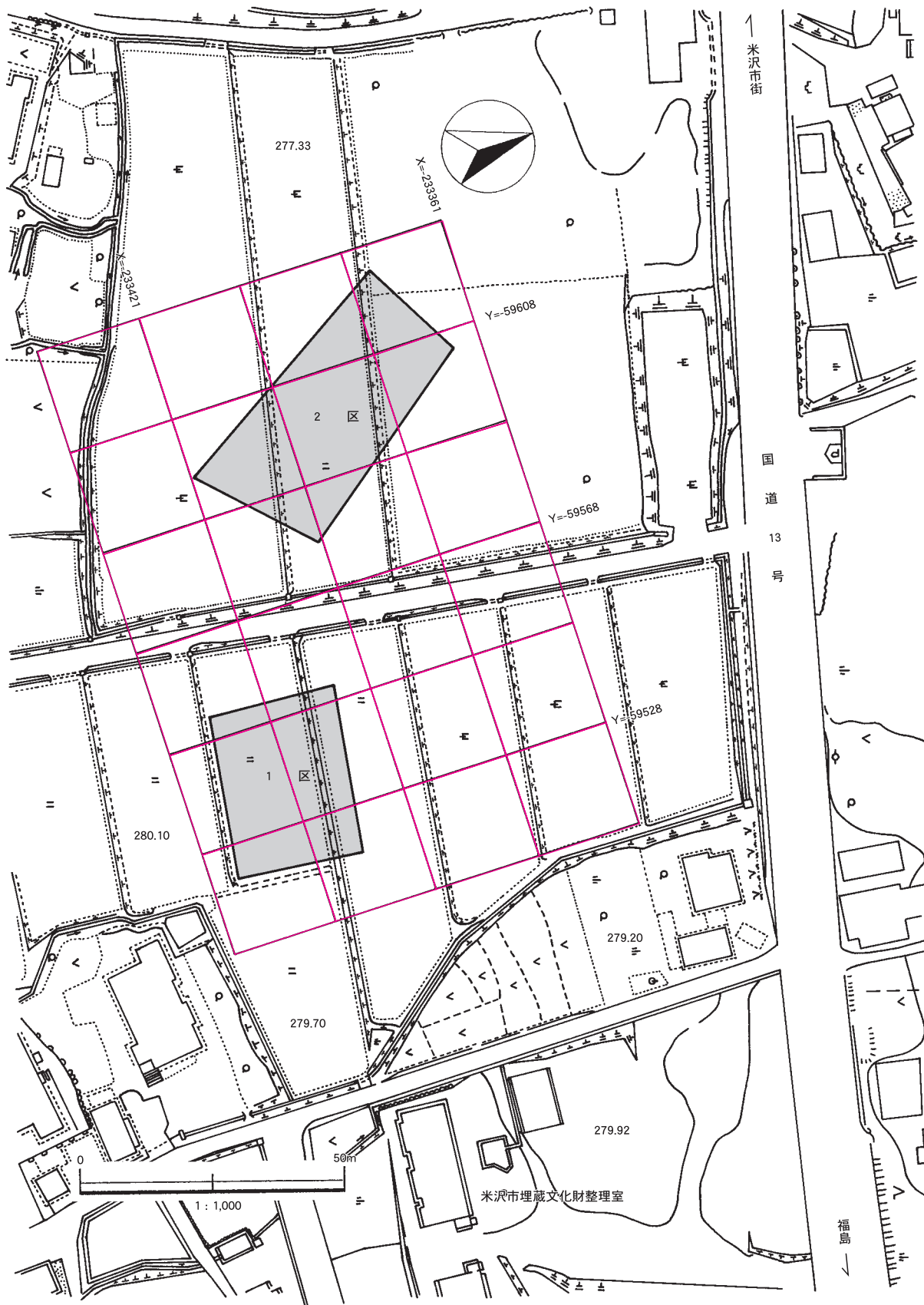
遺物の分布

2 検出遺構

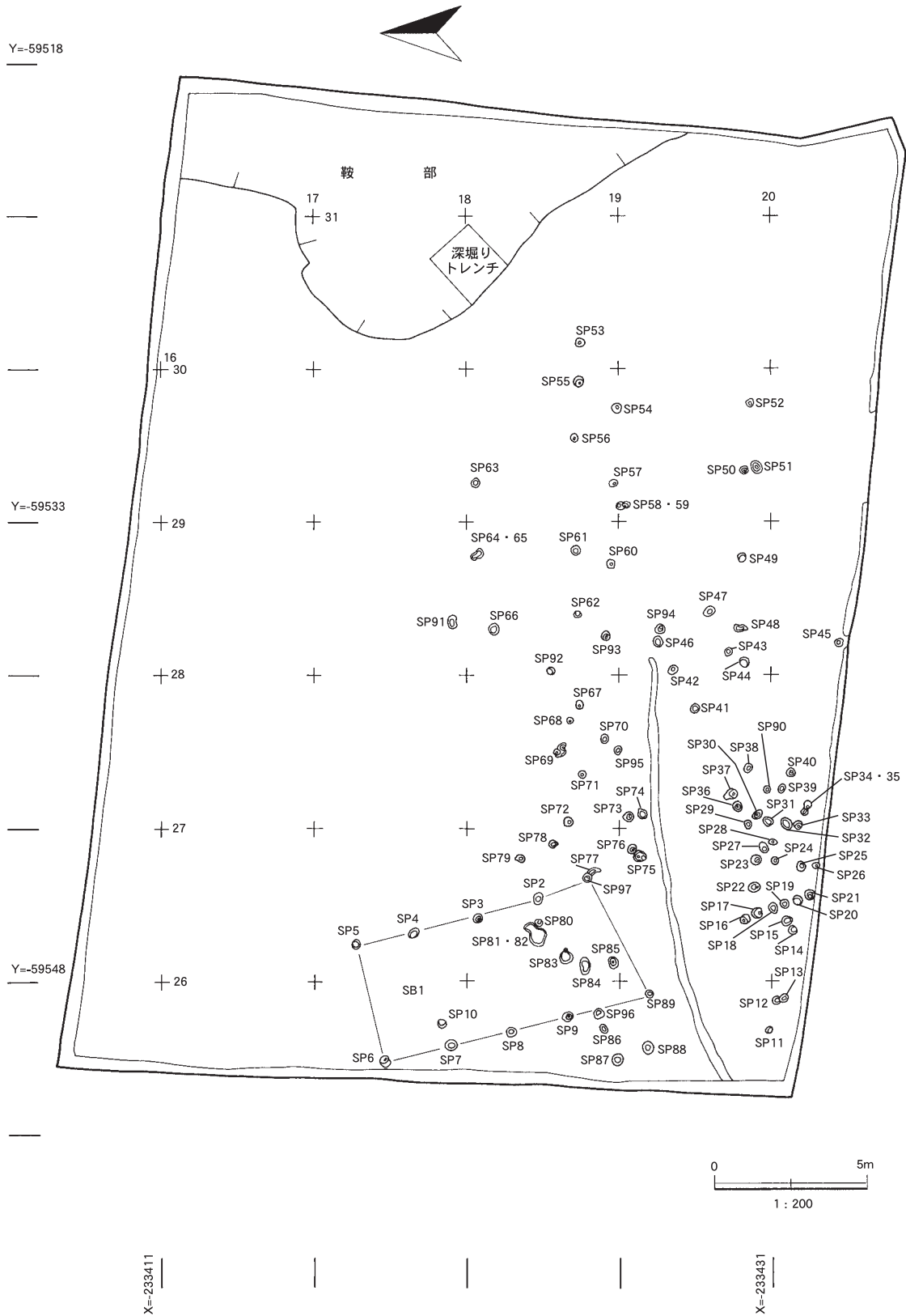
掘立柱建物跡（第10図）

1区西端域25・26-17～19グリッドに位置し、梁行1間・桁行4間の南北棟を構成する建物跡（SB1）である。身舎の梁行長は北面3.9m・南面4.3m、桁行長が西面8.6m・東面7.9mの規模である。柱間距離は南面梁行が4.3mであるのを除き、3.9m（13尺）の等間隔で配列される。桁行は身舎西面SP6・7・8・9・89柱穴で、2.1m（7尺）・2.0m（約7尺）・2.0m（同）・2.5m（約8尺）、身舎東面SP5・4・3・2・97柱穴で、2.0m（約7尺）、2.1m（7尺）・2.0m（約7尺）・1.8m（6尺）を各々測る。

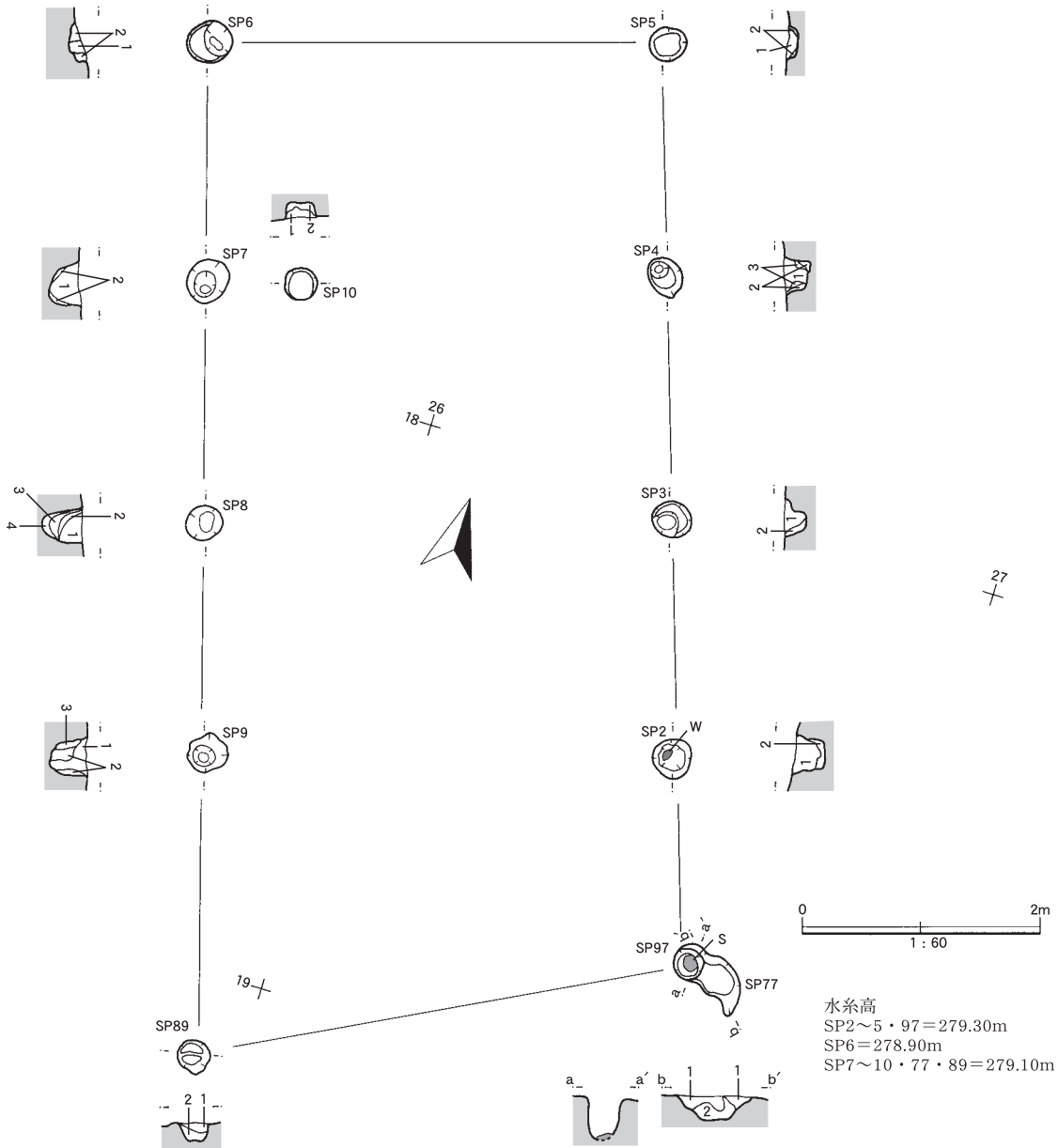
直線的に並ぶ柱穴の組み合わせから、梁行1間・桁行4間の建物を想定したが、SP89・97は東西桁行の柱配列から幾分外れており、梁行もこの2基を除けば3.9m（13尺）の規則的な配置を成している。したがって、梁行1間・桁行3間の建物であった可能性もあり、その構成についてはなお検討の余地を残す。主軸方向は、N-18°-Wである。



第8図 堤屋敷遺跡調査区概要図



第9図 1区遺構配置図



水系高
 SP2~5・97=279.30m
 SP6=278.90m
 SP7~10・77・89=279.10m

- SP2
 1 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y5/1 灰色砂をブロック状に含む)
 2 7.5y5/1 灰色 砂 (10YR2/1 黒色シルトをブロック状に含む)
- SP3
 1 10YR3/1 黒色 シルト (砂混じり)
 2 10YR4/2 灰黄褐色 砂 (地山)
- SP4
 1 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土質シルトを斑紋状に含む)
 2 7.5Y4/2 灰オリーブ色 粘土質シルト (10YR2/1 黒色シルトを40%含む)
 3 7.5Y4/2 灰オリーブ色 粘土質シルト (地山、オーバーハング)
- SP5
 1 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y4/1 灰色砂をブロック状に含む)
 2 7.5Y4/1 灰色 砂 (地山、オーバーハング)
- SP6
 1 10YR2/1 黒色 シルト (未分解有機物を含む)
 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト (酸化鉄分を含む)
- SP7
 1 10YR2/1 黒色 シルト (10YR4/2 灰黄褐色砂をブロック状に含む)
 2 10YR4/2 灰黄褐色 砂 (10YR2/1 黒色シルトを斑紋状に含む)

- SP8
 1 10YR2/1 黒色 シルト (10YR4/2 灰黄褐色砂を斑紋状に含む)
 2 10YR2/1 黒色 シルト (10YR4/2 灰黄褐色砂をブロック状に含む)
 3 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y4/1 灰色砂質シルトをブロック状に含む)
 4 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト (地山・オーバーハング)
- SP9
 1 10YR2/1 黒色 粘土質シルト (7.5Y5/1 灰色砂質シルトをブロック状に含む)
 2 10YR2/1 黒色 粘土質シルト (ほぼ純層)
- SP10
 1 10YR2/1 黒色 粘土質シルト (7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土質シルトを斑紋状に含む)
 2 7.5Y4/2 灰オリーブ色 粘土質シルト (10YR2/1 黒色粘土質シルトをブロック状に含む)
- SP77
 1 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y5/2 灰オリーブ色砂を斑紋状に含む)
 2 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y5/2 灰オリーブ色砂を斑紋状に含む)
- SP89
 1 10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/1 黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む)
 2 7.5Y5/1 灰色 粘土 (10YR2/1 黒色シルトをブロック状に含む)

第10図 SB1 掘立柱建物跡

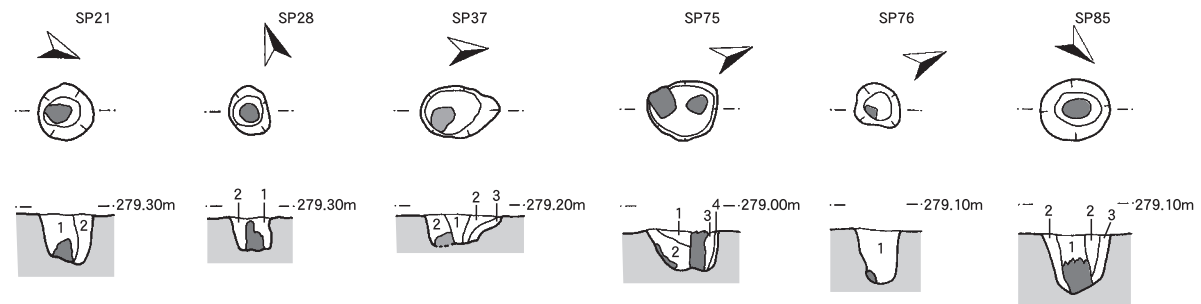
各柱穴は径30~40cmの円形または楕円形を呈し、検出面から深さ15~30cmを測る。掘り方は壁面の途中で段を形成するものや、アタリ部が一段深くなる例なども認められる。SP2の底面では柱根が確認され、柱穴のアタリ部の規模等から径15cm前後の円柱を利用したものと推定される。他は柱が抜き取られたり、朽ちて残存しないものがほとんどである。また、SP97の底面からは石臼片（第23図23）が出土し、柱材の沈み込みを防ぐため設置したと推定される。他に出土遺物が得られなかったことから、建物跡の所属時期については不明である。

石臼転用

柱 穴 (第11~18・20図)

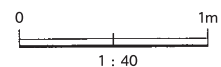
柱穴は1区で97基、2区で7基の計104基が検出された。平面形態は、円形もしくは楕円形を呈するものと隅丸方形を呈するものに大別され、前者が多数を占める。このうち、SB1を構成する8基以外は、建物跡として組み合わせられる配置例が確認されなかった。中には柱根が残存するものや根固め石が認められた柱穴があり、第11図に掲載したSP21ほかの6基がこれに該当する。残存する柱根から、上記のSP2同様に径15cm程の円柱であったことが解る。SP37からは、検出面からの深さ10cmの地点より長方形様の根石（第23図22）を検出している。覆土の土層断面から柱痕跡を確認することができたものとしては、SP38・39・44・95等がある。またSP18・23・51・95等は、途中で段を形成して底面に至る掘り方がなされる例で、柱を固定して据えるための掘り方と理解される。他に浅い皿状を呈するものについては、柱穴以外の用途を考えるべきであろう。柱穴群の覆土は概ね2層からなるものが多く、上記の柱痕跡が認められる事例では、検出面上でも掘り方埋土との区別が容易であった。2区検出のSP105も柱根が残存する柱穴で、検出面からの深さは35cmを測った。

根 固 め 石



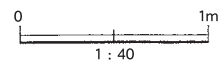
SP21	1 10YR2/1 黒色	シルト	(7.5Y5/1 灰色砂質シルトをブロック状に含む)
	2 10YR2/1 黒色	シルト	(7.5Y5/1 灰色砂をブロック状に含む)
SP28	1 10YR2/1 黒色	シルト	(やや粘土質、炭化物、未分解有機物あり)
	2 10Y5/1 灰色	シルト	(1をブロック状に含む)
SP37	1 10YR2/1 黒色	シルト	(10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトを斑紋状に含む)
	2 10YR2/1 黒色	シルト	(3をブロック状に含む)
	3 10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	(2を斑紋状に含む)
SP75	1 10YR2/1 黒色	シルト	(10YR3/1 黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む)
	2 10YR2/1 黒色	シルト	(ほぼ純層)
	3 10YR3/1 黒褐色	シルト	(7.5Y5/1 灰色砂質シルトを斑紋状に含む)
	4 7.5Y5/2 灰オリーブ色	砂	(1をブロック状に含む)
SP76	1 10YR2/1 黒色	シルト	(10YR5/3 にぶい黄褐色シルトを斑紋状に含む)
SP85	1 10YR2/1 黒色	シルト	(7.5Y5/2 灰オリーブ色砂をブロック状に含む)
	2 10YR2/1 黒色	シルト	
	3 7.5Y5/2 灰オリーブ色	砂	(1を斑紋状に含む)

■ S
■ W

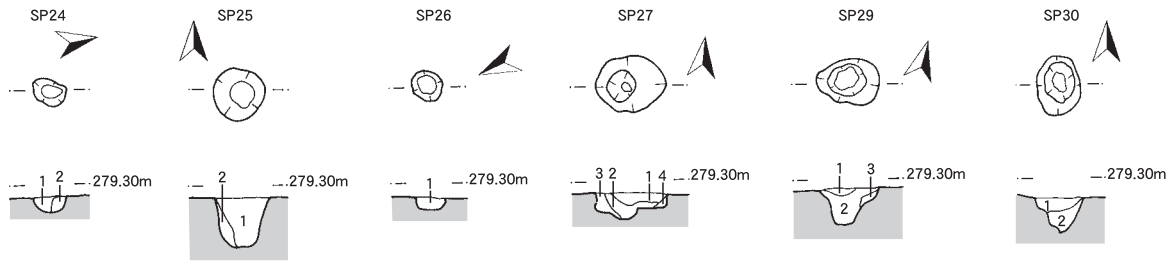


第11図 SP21・28・37・75・76・85柱穴

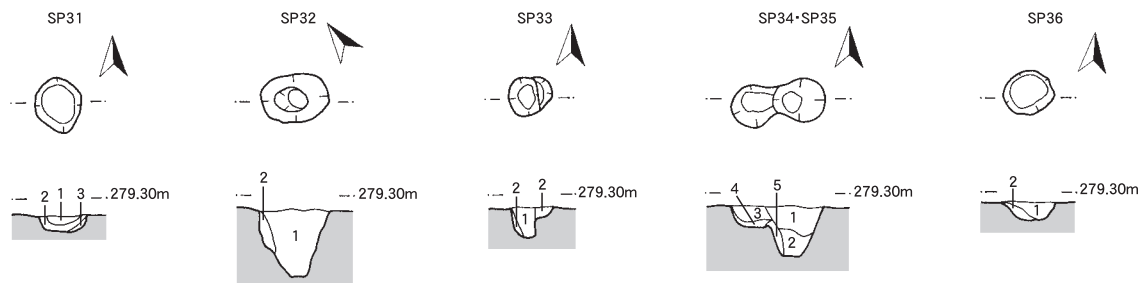
IV 堤屋敷遺跡



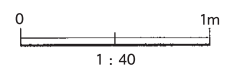
第12図 SP11~20・22・23柱穴



SP24	1 10YR2/1 黒色	シルト	(10YR4/2 灰黄褐色砂をブロック状に含む)
	2 7.5Y4/1 灰色	粘土質シルト	(地山、オーバーハング)
SP25	1 10YR2/1 黒色	シルト	(5Y6/3 オリーブ黄色粘土のブロックを含む)
	2 5Y4/1 灰色	砂質シルト	(5Y4/1 灰色粗砂を含む)
SP26	1 10YR2/1 黒色	シルト	(7.5Y5/1 灰色砂質シルトを斑紋状に含む)
SP27	1 10YR2/1 黒色	シルト	(7.5Y4/1 灰色砂質シルトをブロック状に含む)
	2 10YR2/1 黒色	シルト	(7.5Y4/1 灰色砂質シルトを斑紋状に含む)
	3 7.5Y4/1 灰色	砂質シルト	(2を斑紋状に含む)
	4 7.5Y4/1 灰色	砂	(地山、オーバーハング)
SP29	1 10YR2/1 黒色	シルト	(7.5Y4/1 灰色粘土質シルトをブロック状に含む、炭化物を含む)
	2 10YR2/2 黒褐色	シルト	(1に同じ)
	3 7.5Y4/1 灰色	砂	(2を斑紋状に含む)
SP30	1 10YR2/1 黒色	シルト	(7.5Y4/1 灰色砂を斑紋状に含む、酸化物あり)
	2 10YR2/1 黒色	シルト	(ほぼ純層)

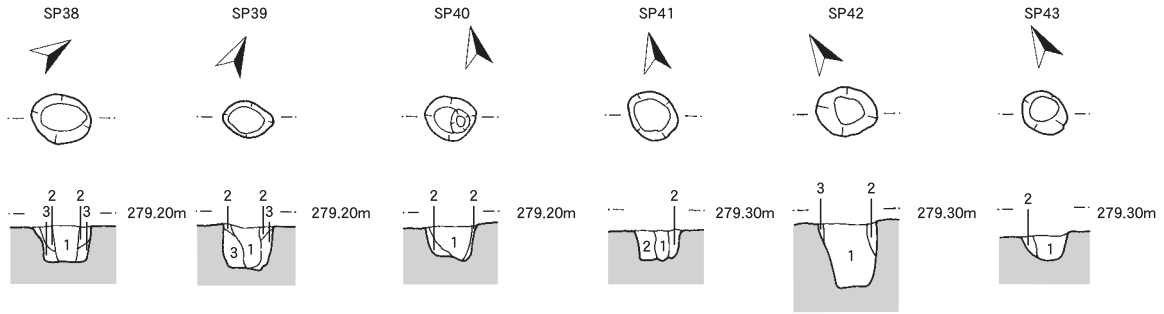


SP31	1 10YR2/1 黒色	シルト	(10YR3/1 黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む)
	2 10YR3/1 黒色	シルト	(10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトを斑紋状に含む)
	3 10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	(地山、オーバーハング)
SP32	1 10YR2/1 黒色	シルト	(7.5Y4/1 灰色砂をブロック状に含む)
	2 10YR2/1 黒色	シルト	(10YR4/1 灰黄褐色シルトをブロック状に含む)
SP33	1 10YR2/1 黒色	シルト	(やや粘土質、未分解有機物を含む)
	2 7.5Y4/1 灰色	粘土質シルト	(1をブロック状に含む)
SP34・35	1 10YR2/1 黒色	シルト	(10YR3/1 黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む)
	2 10YR2/1 黒色	シルト	(10YR3/1 灰黄褐色粘土質シルトを斑紋状に含む)
	3 10YR2/1 黒色	シルト	(10YR4/2 灰黄褐色シルトをブロック状に含む)
	4 10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	(3を斑紋状に含む)
	5 10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	(地山、オーバーハング)
SP36	1 10YR2/1 黒色	シルト	(ほぼ純層)
	2 10YR2/1 黒色	シルト	(10YR4/2 年粘土質シルトをブロック状に含む)

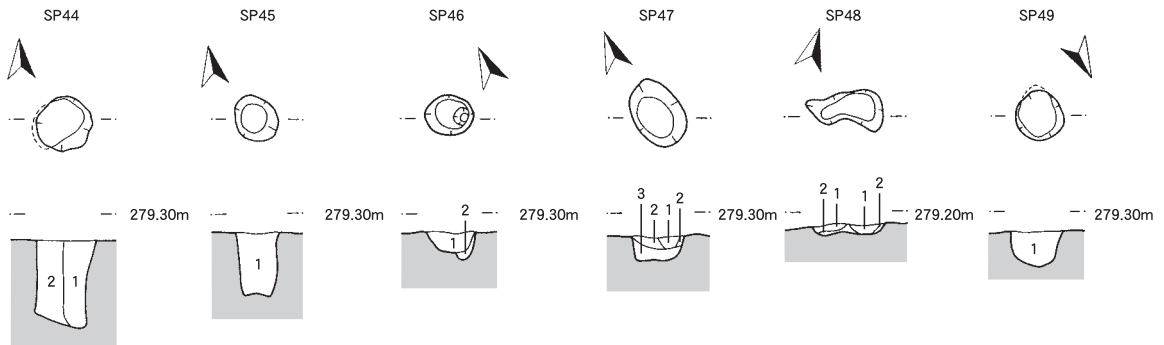


第13図 SP24～36柱穴

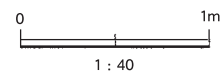
IV 堤屋敷遺跡



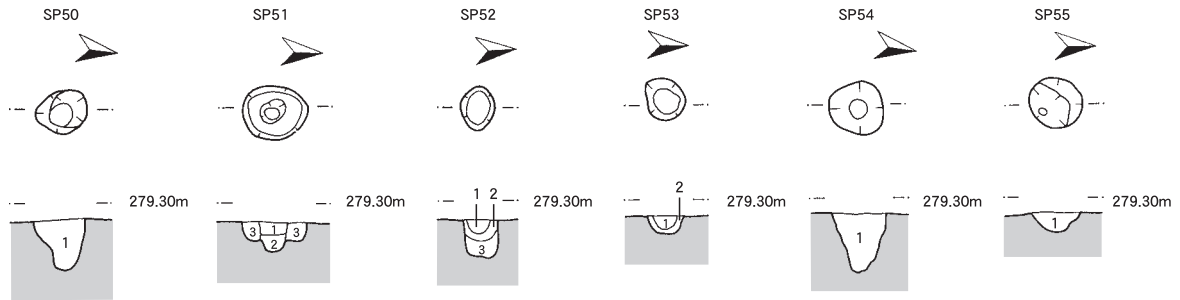
- SP38**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (砂混じり)
 2 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y4/1を灰色粘土質シルトをブロック状に含む)
 3 7.5Y5/1 灰色 粘土質シルト (10YR2/1黒色シルトをブロック状に含む)
- SP39**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/1黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む)
 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂 (1をブロック状に含む)
 3 7.5Y4/2 灰オリーブ色 砂 (地山、オーバーハング)
- SP40**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (砂混じり)
 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂 (地山、オーバーハング)
- SP41**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (砂混じり)
 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト (酸化鉄分を多く含む)
- SP42**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (炭化物と未分解木片を含む)
 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト (10YR5/2灰黄褐色粘土をブロック状に含む)
 3 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂 (地山、オーバーハング)
- SP43**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (砂混じり)
 2 10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/1 粘土質シルトと7.5Y5/1砂質シルトをブロック状に含む)



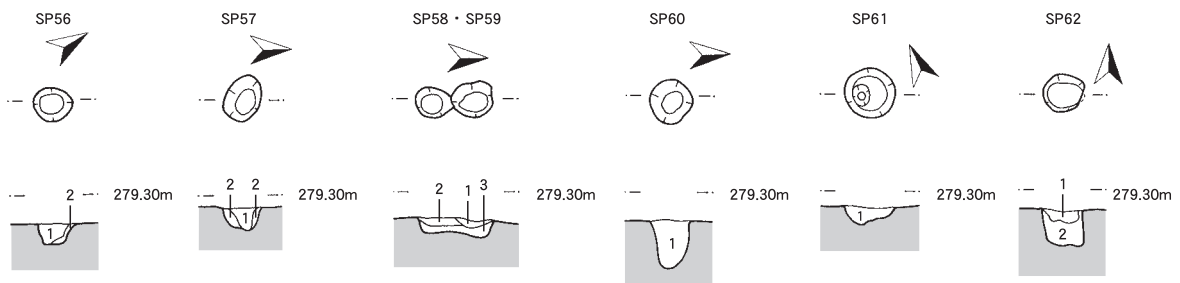
- SP44**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (砂混じり)
 2 10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/1 粘土質シルトと7.5Y5/1砂質シルトをブロック状に含む)
- SP45**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y5/1灰色粘土をブロック状に含む)
- SP46**
 1 10YR2/1 黒色 シルト
 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト (1を斑紋状に含む)
- SP47**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (砂混じり、2をブロック状に含む)
 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト (1をブロック状に20%含む)
 3 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト (酸化鉄分を多く含む、地山)
- SP48**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (しまりなし、未分解有機物を含む)
 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト (地山)
- SP49**
 1 10YR2/1 黒色 シルト (砂混じり)



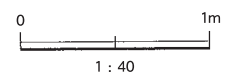
第14図 SP38～49柱穴



SP50	1 10YR2/1 黒色	シルト	(砂混じり、ほぼ純層)
SP51	1 10YR2/1 黒色 2 10YR3/2 黒褐色 3 10YR3/2 黒褐色	シルト 粘土質シルト シルト	(砂混じり、10YR3/1黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む) (1を班紋状に含む、酸化鉄を多く含む) (1ブロック状に、10YR3/3暗褐色粘土質シルトを班紋状に含む)
SP52	1 10YR2/1 黒色 2 10YR3/2 黒褐色 3 5Y4/1 灰色	シルト シルト 粘土質シルト	(砂混じり) (1を班紋状に含む、酸化鉄を多く含む) (地山)
SP53	1 10YR2/1 黒色 2 10YR3/1 黒褐色	シルト 粘土質シルト	(砂混じり、10YR3/1黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む) (砂を多量に含む)
SP54	1 10YR2/1 黒色	粘土質シルト	(粗砂を含む)
SP55	1 10YR2/1 黒色	粘土質シルト	(粗砂を含む)

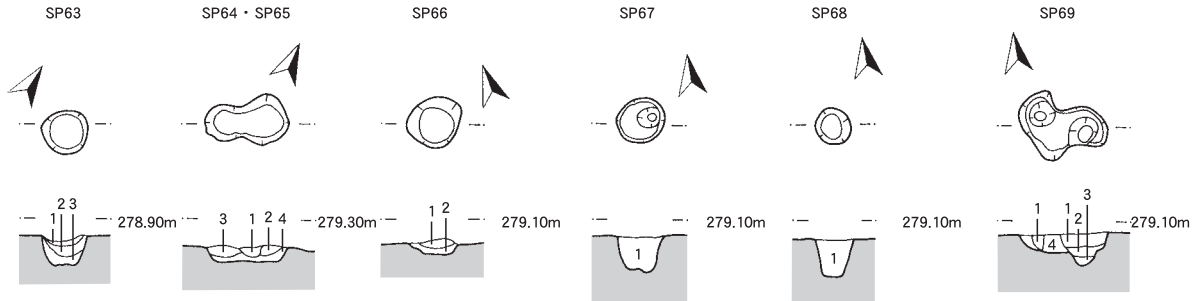


SP56	1 10YR2/1 黒色 2 10YR3/1 黒褐色	シルト 粘土質シルト	(砂混じり、10YR3/1黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む) (砂を多量に含む)
SP56	1 10YR2/1 黒色 2 10YR3/1 黒褐色	シルト 粘土質シルト	(砂混じり、10YR3/1黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む) (砂を多量に含む)
SP57	1 10YR2/1 黒色 2 10YR3/2 黒褐色	シルト シルト	(砂混じり、10YR3/1黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む) (粗砂を多く含む、1をブロック状に含む)
SP58・59	1 10YR3/1 黒褐色 2 10YR3/1 黒褐色 3 10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	(10YR2/1黒色シルトをブロック状に含む) (10YR2/1黒色シルトをブロック状に含む) (砂を多量に含む、地山)
SP60	1 10YR2/1 黒色	シルト	(砂混じり)
SP61	1 10YR2/1 黒色	シルト	(砂混じり)
SP62	1 10YR2/1 黒色 2 10YR3/1 黒褐色	シルト 粘土質シルト	(砂混じり) (5Y4/1灰色砂をブロック状に含む)



第15図 SP50～62柱穴

IV 堤屋敷遺跡



SP63
 1 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト (ほぼ粘土化した木片、10YR2/1黒色シルトをブロック状に含む)
 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト (砂混じり、ほぼ粘土化した木片を含む)
 3 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト (砂を多量に含む、地山)

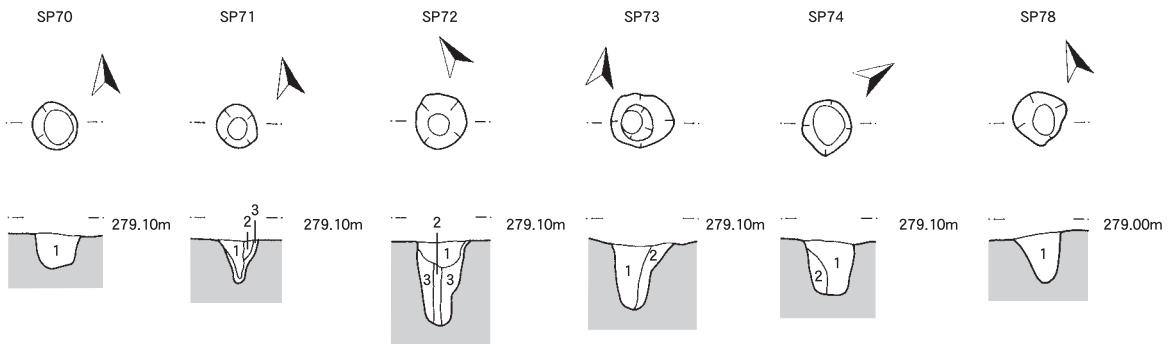
SP64・65
 1 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト (5Y4/1灰色砂を含む、酸化鉄分を多く含む)
 2 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト (5Y4/1灰色砂を多く含む)
 3 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト (10YR/1黒色シルトをブロック状に含む)
 4 5Y4/1 灰色 砂 (地山)

SP66
 1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト(40%) + 10YR2/1黒色シルト(20%) + 5Y4/1灰色砂(40%)の攪乱層

SP67
 1 10YR2/1 黒色 シルト (砂混じり、10YR4/1褐灰色粘土質シルトをブロック状に含む)

SP68
 1 10YR/1 黒色 シルト (砂混じり、10YR4/1褐灰色粘土質シルトを斑文状に含む)

SP69
 1 10YR2/1 黒色 シルト (砂混じり)
 2 10YR3/2 黒褐色 シルト (ほぼ粘土化した未分解有機物を含む)
 3 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト
 4 10YR4/2 灰黄褐色 粘土 (砂混じり)



SP70
 1 10YR/1 黒色 シルト (砂混じり、10YR4/1褐灰色粘土質シルトを斑紋状に含む)

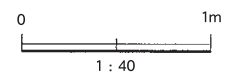
SP71
 1 10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/2黒褐色シルトをブロック状に含む)
 2 10YR2/1 黒色 シルト (未分解有機物を含む)
 3 5Y4/1 灰色 砂 (地山・オーバーハング)

SP72
 1 10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/2黒褐色シルトをブロック状に含む)
 2 10YR2/1 黒色 シルト (やわらかく、しまりなし、未分解有機物を含む)
 3 7.5Y5/2 灰オリブ色 砂 (1をブロック状に含む)

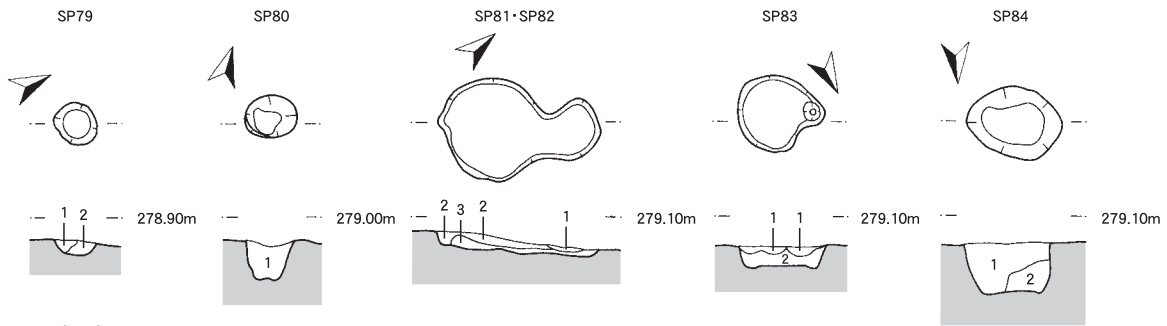
SP73
 1 10YR/1 黒色 シルト (砂混じり、10YR4/1褐灰色粘土質シルトを斑紋状に含む)
 2 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト (7.5Y5/1灰色砂質シルトをブロック状に含む)

SP74
 1 10YR2/1 黒色 シルト (砂混じり)
 2 10YR3/2 黒褐色 シルト (7.5Y5/2灰オリブ色砂を含む)

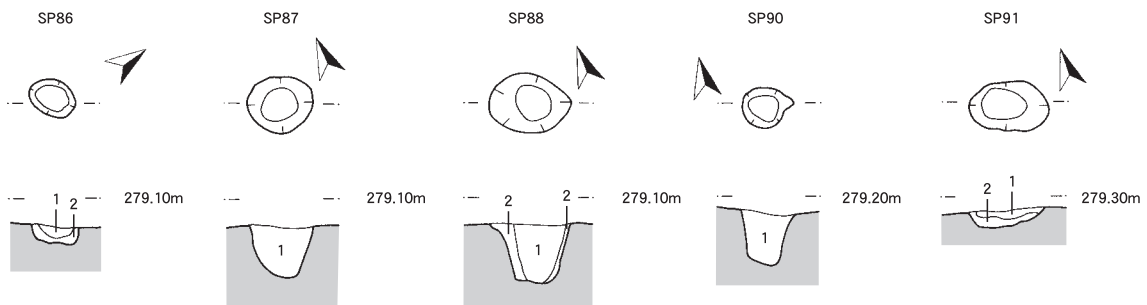
SP78
 1 10YR2/1 黒色 シルト (ほぼ純層)



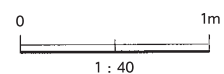
第16図 SP63～74・78柱穴



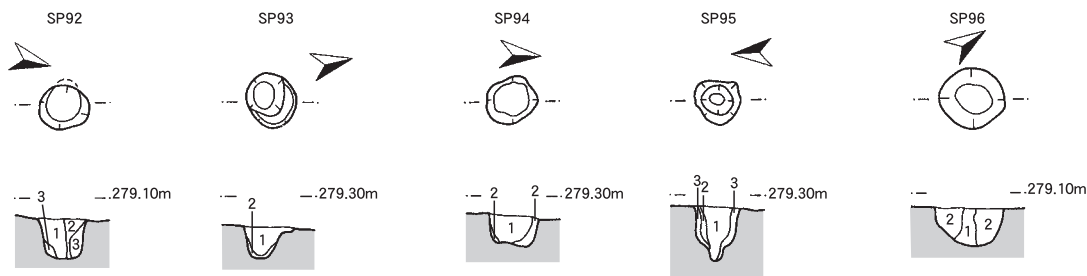
- SP79
 1 10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/2黒褐色シルトをブロック状に含む)
 2 10YR3/1 黒褐色 シルト (7.5Y5/1灰色砂質シルトを斑紋状に含む)
- SP80
 1 10YR2/1 黒色 シルト (ほぼ粘土化した有機物を含む、7.5Y5/1灰色砂質シルトを斑紋状に含む)
 2 7.5Y5/1 灰色 砂質シルト (地山、オーバーハング)
- SP81・SP82
 1 10YR2/1 黒色 シルト (ほぼ粘土化した有機物を含む、7.5Y5/1灰色砂質シルトを斑紋状に含む)
 2 10YR2/2 黒褐色 シルト (10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトを含む)
 3 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト
- SP83
 1 10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/1黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む)
 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト
- SP84
 1 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y4/1灰色粘土と砂質シルトをブロック状に含む)
 2 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y5/2灰色粘土を50%含む)



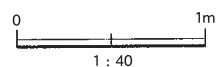
- SP86
 1 10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/1黒褐色粘土質シルトを斑紋状に含む)
 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト (1をブロック状に含む)
- SP87
 1 10YR2/1 黒色 シルト (純層)
- SP88
 1 10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/1黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む)
 2 7.5Y5/2 灰オリーブ色 粘土 (1との攪乱層)
- SP90
 1 10YR3/1 黒褐色 シルト (砂混じり、未分解有機物を含む)
- SP91
 1 10YR2/1 黒色 シルト (7.5Y4/1灰色砂をブロック状に含む)
 2 10YR4/2 灰黄褐色 砂 (地山)



第17図 SP79～91柱穴



SP92			
1	10YR2/1	黒色	シルト (砂混じり)
2	10YR2/1	黒色	シルト (砂混じり、酸化鉄分を多く含む)
3	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト (10YR2/1 黒色シルトをブロック状に含む)
SP93			
1	10YR2/1	黒色	シルト (砂混じり)
2	10YR4/2	灰黄褐色	砂 (10YR3/1 粘土混じりの地山)
SP94			
1	10YR2/1	黒色	シルト (砂混じり)
2	10YR4/2	灰黄褐色	砂 (10YR3/1 粘土混じりの地山)
SP95			
1	10YR2/1	黒色	シルト (10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に含む、未分解の木片を含む)
2	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト (酸化鉄分を多く含む)
3	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト (地山、オーバーハング)
SP96			
1	10YR2/1	黒色	粘土質シルト
2	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト (7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土をブロック状に含む)



第18図 SP92～96柱穴

土坑 (第20図)

土坑として登録した3基 (SK101～103) は、2区の中央～北西部において検出されたが、いずれも坑内からの出土遺物がないため、時期については不明である。

調査区中央部西寄りの14・15-12グリッドで検出されたSK101は、長軸約1.7m・短軸約1.3mの規模で、平面形が東側に張り出しを有する隅丸三角形を呈している。東辺部で楕円を呈すピット状の掘り込みと重複しており、これによって切られる新旧関係が知られる。検出面からの深さ約20cmを測るが、底面には複数の掘り込みが認められるため一様ではない。周壁の立ち上がりは急傾である。覆土は自然堆積による5層からなるが、土層断面において切り合いが生じて

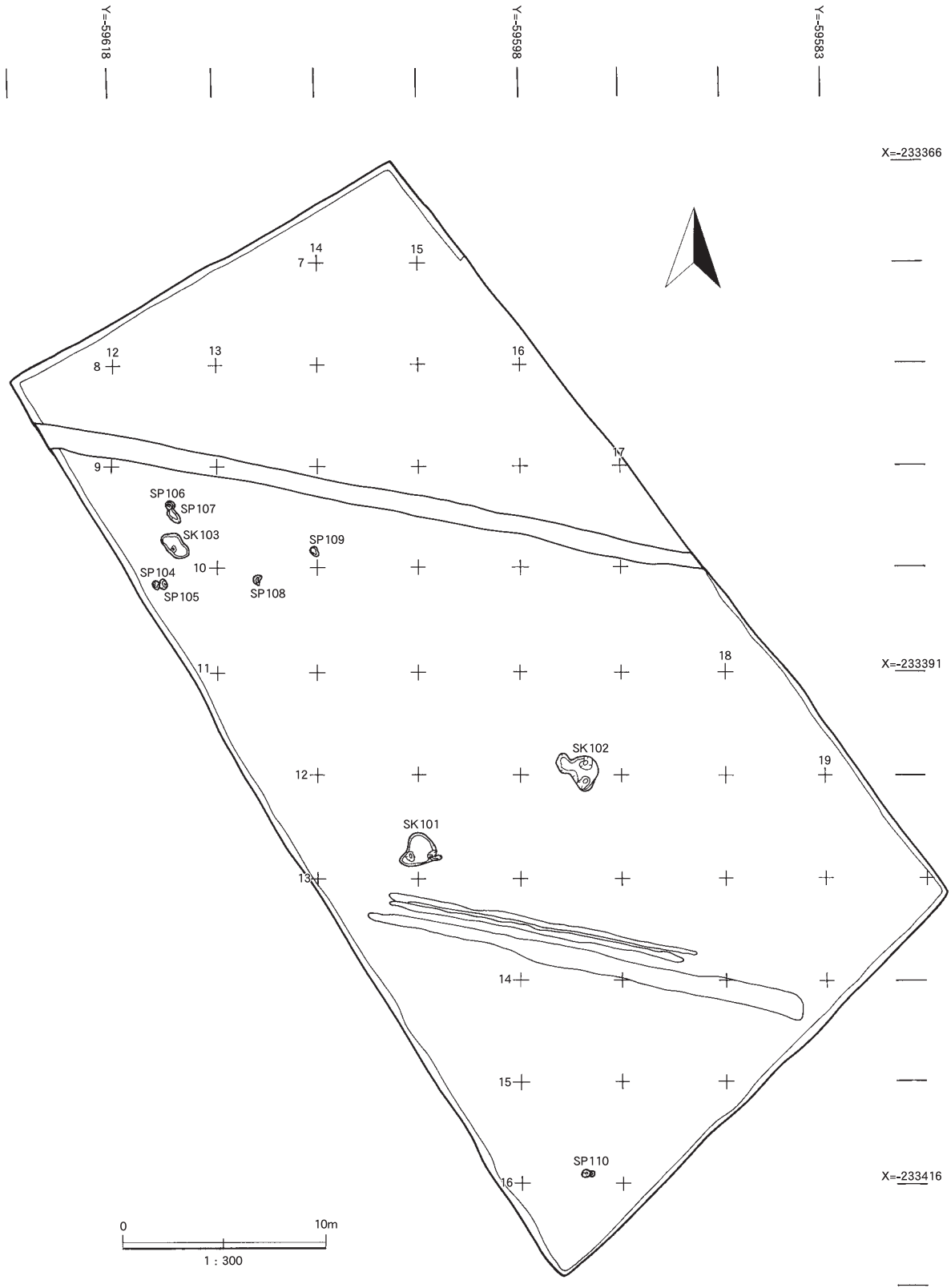
別遺構の重複

いることから、プラン内に検出時で判別できなかった遺構の重複があったと想定される。遺物は得られなかったが、第22図に示した石鏃1点は本坑の西辺に近接した地点から出土している。

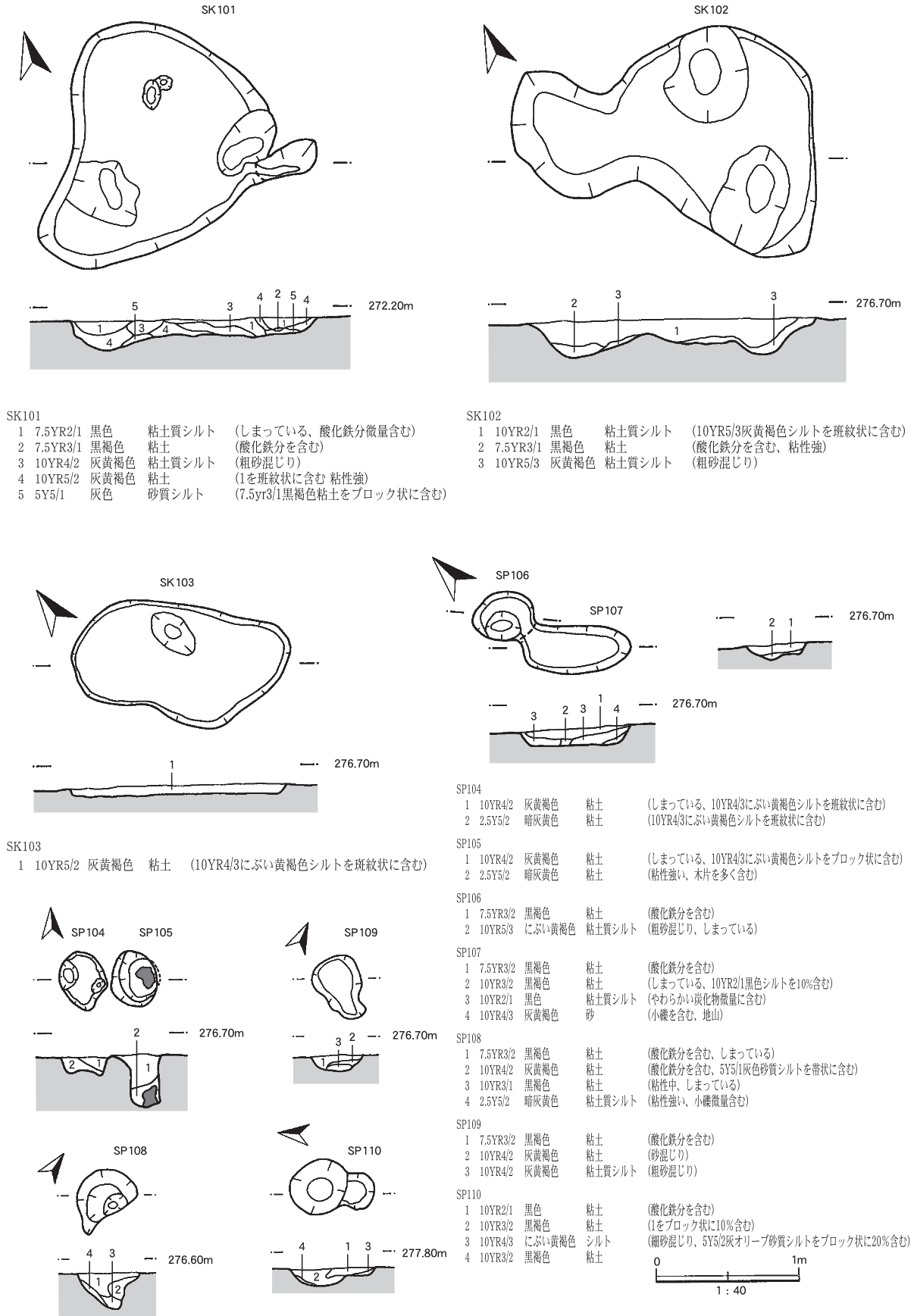
同時埋没

SK102は調査区中央部16-11・12グリッドで検出された、ダルマ形を呈する土坑である。規模は長軸2.0m、検出面からの深さ約25cmを測る。平面形から遺構2基の重複と思われるが、断面観察から廃棄後は同時に埋没したようで、新旧関係は明らかでない。また、底面東側には2箇所の落ち込みによる凹凸があり、さらに別遺構の重複の可能性もあるが定かではない。覆土は粘土を基調にした3層に分けられる。

調査区北西部12-9グリッドに位置するSK103は、長軸1.5m・短軸70cm規模の楕円形を呈する。検出面からの深さ6cmで地山に達する浅い皿状の形態のため、掘り込み面がかなり上位であったとも考えられる。



第19図 2区遺構配置図



第20図 2区検出土坑・柱穴

3 出土遺物

整理用コンテナ2箱分量の遺物が出土し、主だったものを第21～23図に示した。第21図1は青磁碗の体部片で、単位の多い細描連弁文が認められる。17世紀前半に比定される。2は鉄釉が施された瓶の肩部と思われるが、細片のため定かでない。4は瓦質土器、その他は陶器の碗・皿・播鉢等である。5・6は内外面に鉄釉を施し、底部が回転糸きりによって切り離されるもので、17世紀後半の所産と考えられる。7の播鉢は卸目が密に施され、口縁直下の凸帯はつまみ出しによる。第22図8は基部に凹弧状のわずかな挟り込みが入る凹基石鏝である。9は「熙寧元寶」で、初鑄1068年の北宋銭である。10～13は珠洲の鉢・甕類である。外面は平行や格子状タタキ目、内面には綾杉状などのアテ痕が認められる。14～21は染付け等の湯飲み碗・碗・皿類で、19世紀以降近代にかけてのものである。これらの産地は、瀬戸・肥前のほか在地の大堀相馬・会津本郷産などと思われる。以上の近世陶磁器は、17世紀代と19世紀から近代にかけてのものに分けられ、18世紀にあたるものが見られない。したがって、この時期には遺跡周辺に集落が存在しなかったものと理解される。

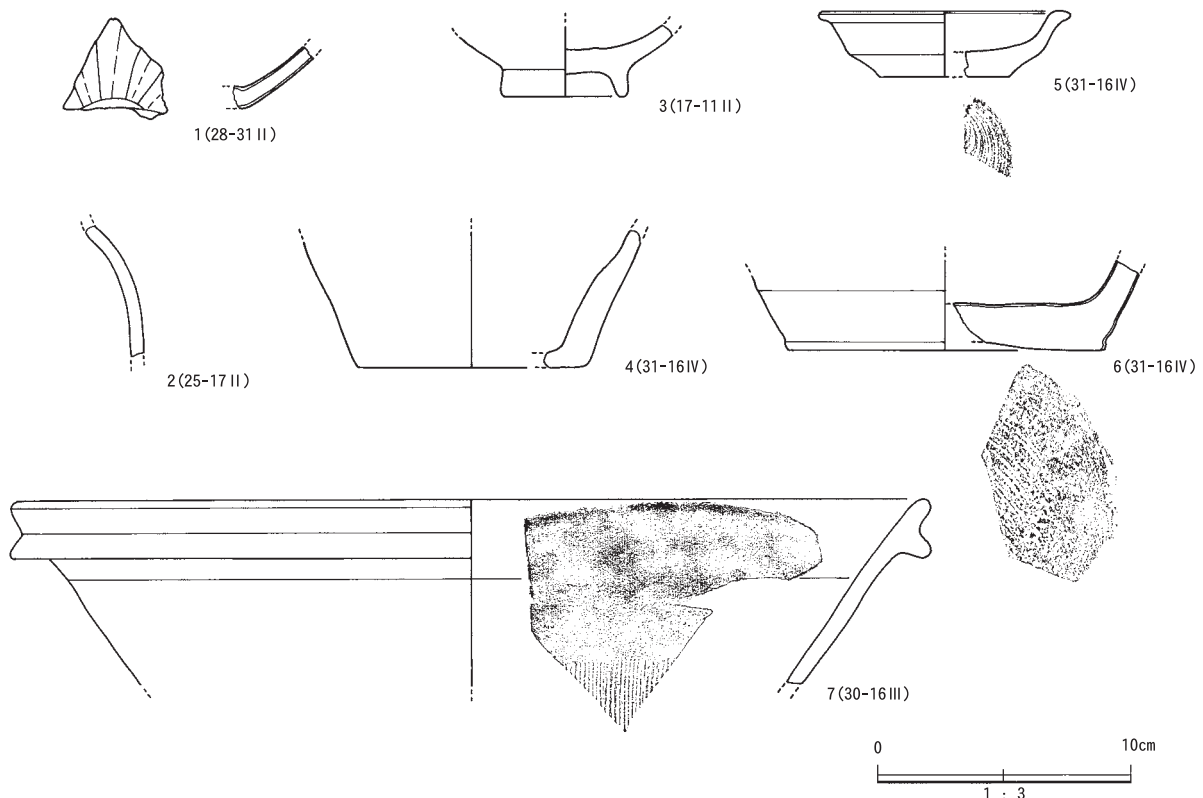
近世陶磁器

珠洲糸陶器

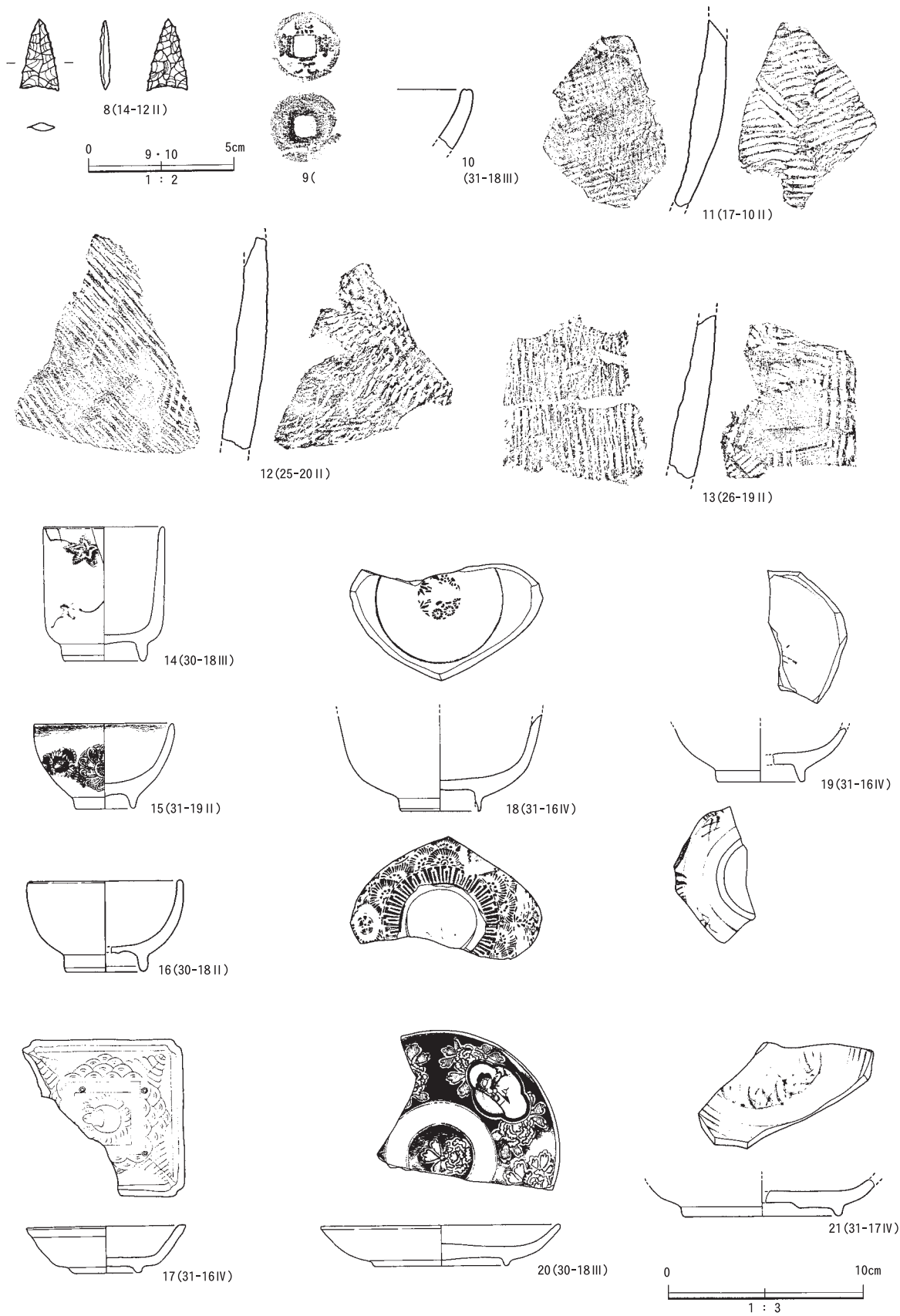
産地

第23図は柱穴底面より出土した根石または根固め石2点であり、双方とも石臼の上臼を転用したものと考えられる。22は大部分を欠損するが、出土上面側が人為的に打ち砕かれ、中央部に柱を据えたと思われる方形様の窪みがある。裏面と側面の一部には煤が付着する。23は推定直径24cm程を測る完形品の約5分の2が残存し、片面側全面に煤が厚く付着する。形状や出土状況等から、柱穴側面の押さえに用いられたと推測される。

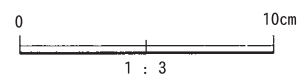
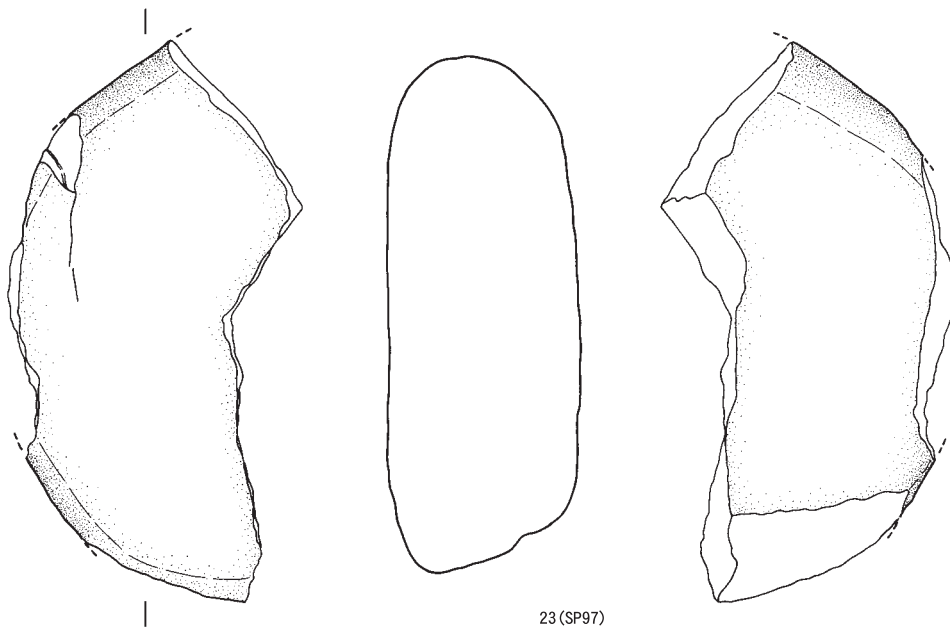
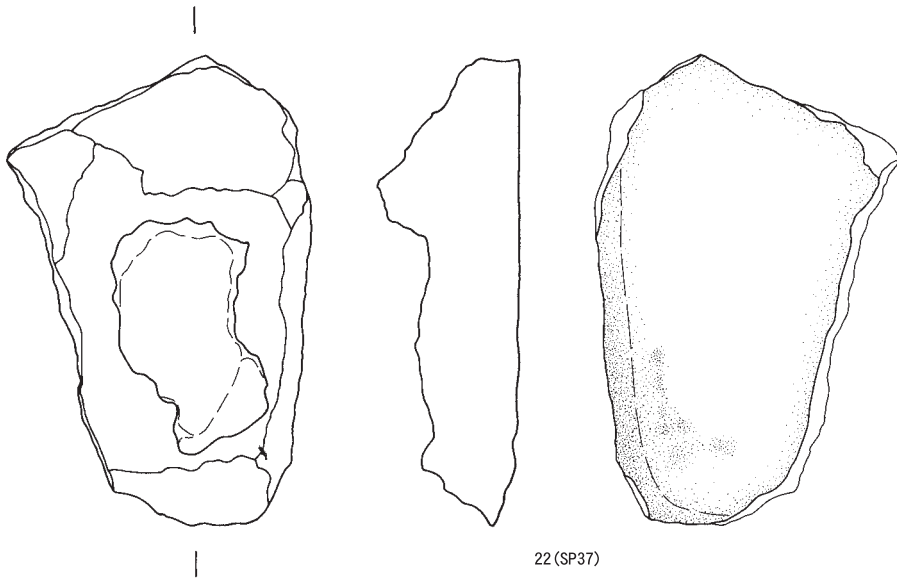
煤付着



第21図 出土遺物(1)



第22図 出土遺物(2)



第23図 出土遺物(3)

V ま と め

1 稲荷山館跡

今回の調査範囲は、現状で確認できる館跡の南辺土塁から70m程の外郭域にあたり、館跡関連の施設や館跡に付随した耕作地が存在した可能性も考えられたが、これらの痕跡は確認されなかった。館跡の主体はすでに現国道によって南北に分断されており、西・南辺に残存する土塁と空堀から、一辺約70m規模の片直角（L字状）形態と推測されている。

稲荷山館跡は山麓の自然地形を利用し、尾根に面した空間を土塁と堀でL字状に区画して構築されたと考えられる。山城に対する平城に分類されるが、平城は米沢城のような三ノ丸を含む総曲輪を構成したものから、半町四方の屋敷までと規模的に多様である。平城の場合は、現在の市街地や水田地帯に所在していることもあって、後世の開発で破壊を受け消滅した事例も少なくない。したがって、明確に城館全体の痕跡を遺すものはごく限られよう。

本館跡は『山形県中世城館遺跡調査報告書』（県教委1995）によれば、「稲荷山型」と称され分類基準になっている。これは山麓を利用した山寄式の形態を有するもので、山を背景としてL字状に土塁と堀で区画することを特徴としている。この形態の事例は本館跡のほか、米沢市の森合館跡や馬ノ越道館跡が代表として挙げられ、川西町玉庭地区と南陽市宮内地区に類似した小規模な館跡が残存しているようだ。これらは、出土遺物等により14世紀代の構築と目されている。城館跡は築城者すら明確にできないものが大半のなか、第三章で触れたとおり本館跡は長井氏の家臣熊坂利衛門の築城とされ、伊達氏の置賜侵入に際に最後まで戦ったが敗れ、廃城になったと言われている。

2 堤屋敷遺跡

16年度の試掘調査により中世の城館跡として登録された遺跡である。広範な遺跡範囲内は、旧来の地形によって幾つかの遺跡に分割されるものと思われ、今後の用地買収に伴う試掘調査の進展により、その様相が明らかになるであろう。

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟・柱穴104基・土坑3基などであり、1区南西域を中心にして分布する傾向が窺われ、旧来の地形的要因に基づいた配置とみなされた。SB1は梁行1間・桁行4間の南北棟を構成する建物跡で、倉庫跡と考えられる。柱穴は1区で97基、2区で7基の計104基が検出された。SB1を構成する8基以外は建物跡として組み合わせられる配置例が確認されなかったが、中には柱根が残存するものや根固め石が出土したものが計8基認められた。

出土した遺物は近世陶磁器が主で、他に中世陶器・古銭・石鏃や、柱穴内に根固め石として置かれた石臼の転用品などがある。これらは遺構の分布同様その大半が1区から出土しているが、大方は北東域の谷状鞍部から集中して出土した。近世陶磁器は17世紀代と19世紀から近代にかけてのものに分けられ、18世紀にあたるものが見られなかった。

写真図版



調査区遠景



重機稼動状況



抜根作業状況



面整理状況



面精査状況



平板測量状況



近世陶器出土状況



旧沢筋検出状況

稻荷山館跡



SK1 土層断面



SK2 土層断面



前期調査区東壁土層断面(1)



前期調査区東壁土層断面(2)



前期調査区南壁土層断面



後期調査区東壁土層断面



後期調査区北壁土層断面(1)



後期調査区北壁土層断面(2)

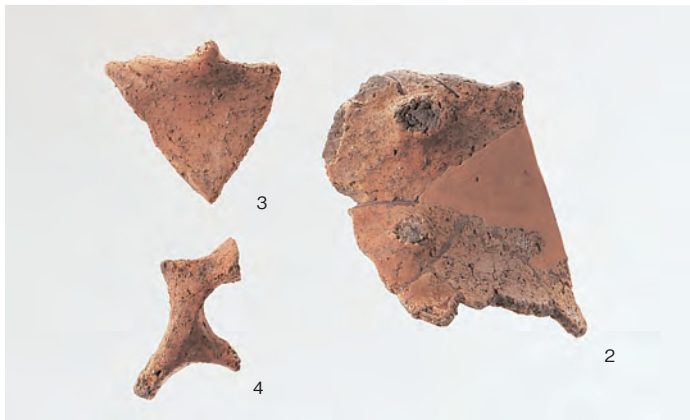
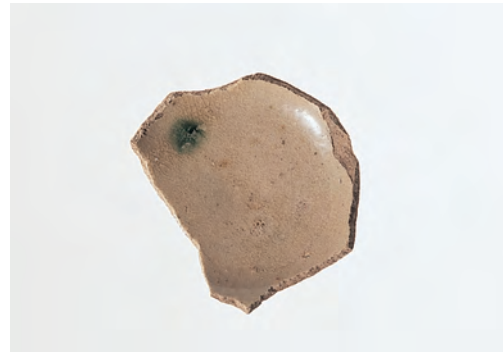


前期調査区完掘状況（北から）



後期調査区完掘状況（南から）

稲荷山館跡



出土遺物



調査区遠景



調査区設定



試掘状況



重機稼動状況



面整理状況



遺構マーキング状況



遺構精査状況



断面実測状況

堤屋敷遺跡



1区遺構完掘状況（西域）



1区遺構完掘状況（南西端）



SB 1 掘立柱建物跡



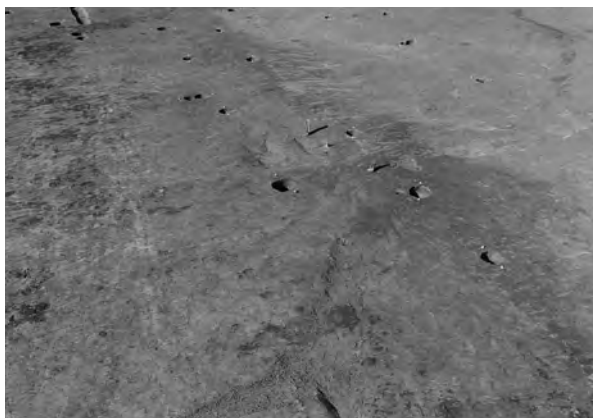
1区遺構完掘状況（南域）



SB 1 柱穴列



1区遺構完掘状況（中央域）



1区遺構完掘状況（東半域）



1区北東域鞍部



SP21完掘状況



SP28完掘状況



SP37完掘状況



SP75・76完掘状況



SP85完掘状況



SP97完掘状況



SP51完掘状況



SP14・15完掘状況

堤屋敷遺跡



SK101・102完掘状況



SK103・SP104~107完掘状況



SK103完掘状況



SP104・105完掘状況



SP106・107完掘状況



SP108完掘状況



SP109完掘状況



SP110完掘状況



1区完掘状況（南から）



2区完掘状況（南から）

1 区柱穴群検出状況
(北域)



1 区柱穴群検出状況
(中央域)



1 区柱穴群検出状況
(南域)

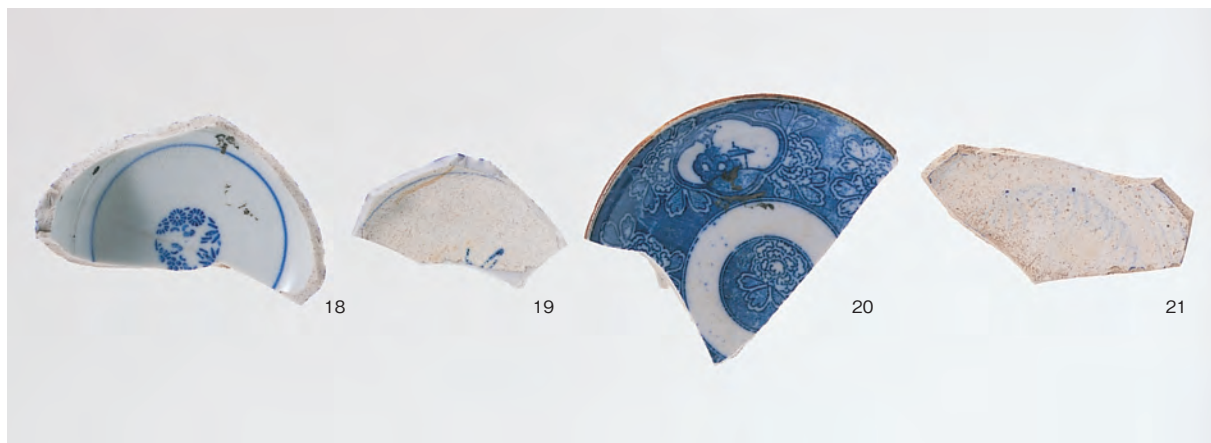
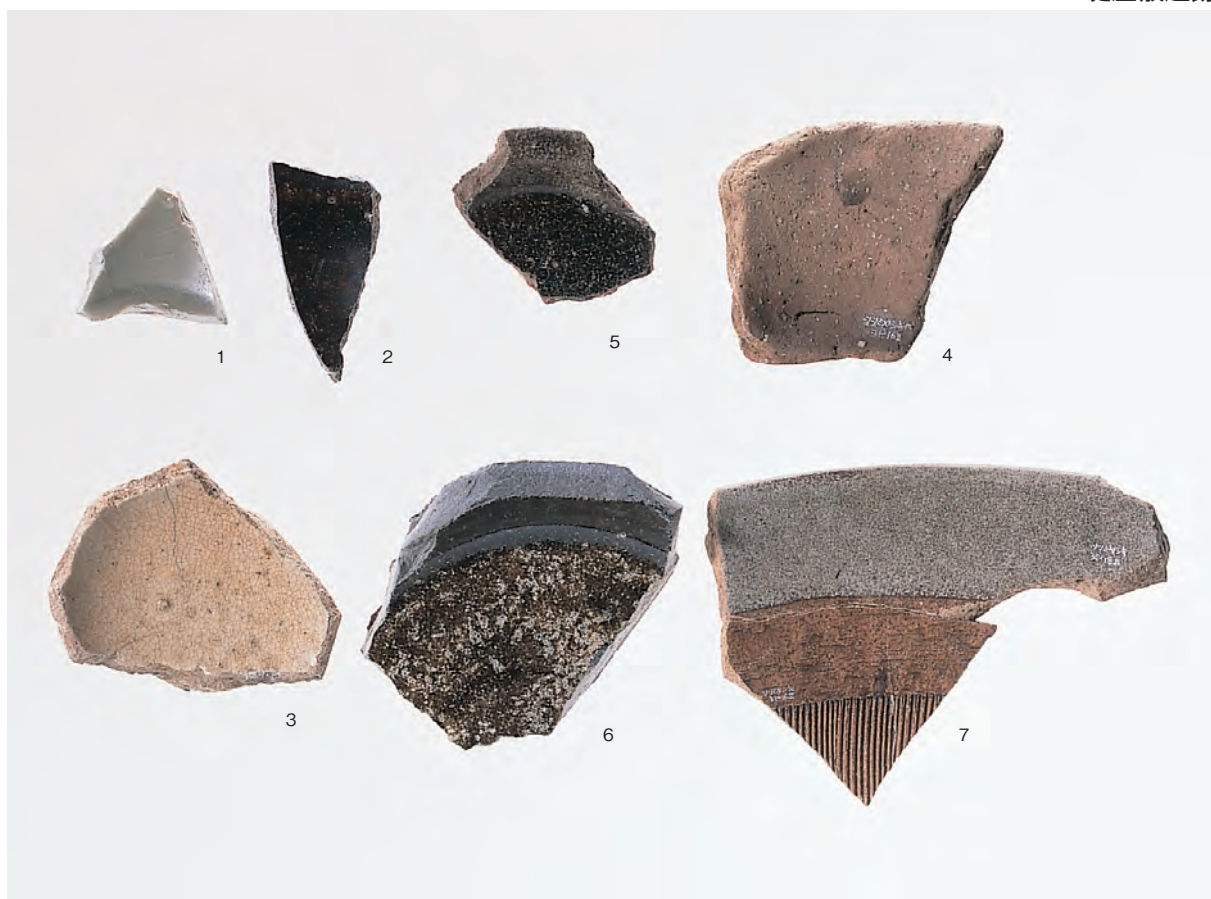




SK101完掘状況（南から）

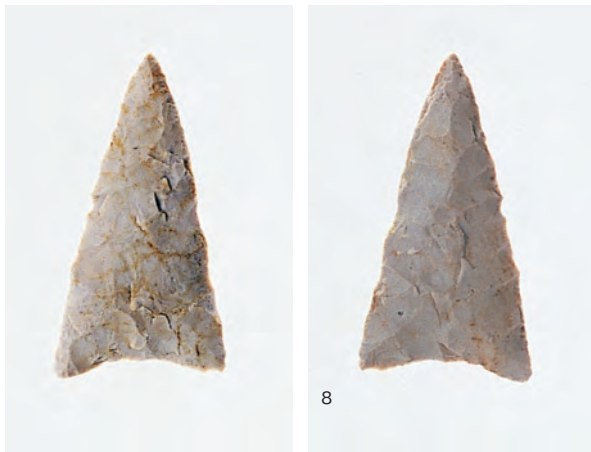


SK102完掘状況（南から）

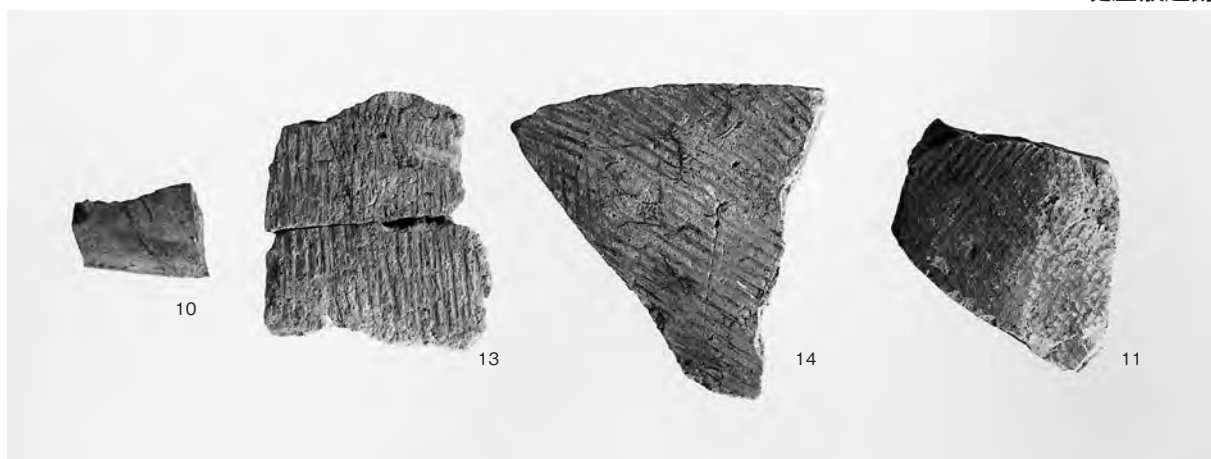


出土遺物(1)

堤屋敷遺跡



出土遺物(2)



出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	いなりやまたてあと・つつみやしきいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	稲荷山館跡・堤屋敷遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第156集							
編著者名	須賀井新人 山木 巧							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301							
発行年月日	2006年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いなりやまたてやま 稲荷山館跡	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 ばんせいちょうあずさやま 万世町 梓山 あざいなりやま 字 稲荷山	6202	A-393	37度 53分 39秒	140度 09分 45秒	20050822 ～ 20051019	720	東北中央 自動車道 相馬尾花 沢線（福 島～米沢 間）建設
			平成16年度 登録	37度 53分 44秒	140度 09分 19秒	20051005 ～ 20051118		
つつみやしきいせき 堤屋敷遺跡	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 ばんせいちょうくわやま 万世町 桑山 あざつつみやしき 字 堤屋敷							
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
稲荷山 館跡	城館跡	中世（14世紀）	土坑	2	縄文土器 土師器 近世磁器	今回の調査範囲内からは中世の館跡に関する遺構・遺物は確認されない。 (文化財認定箱数：1)		
堤屋敷 遺跡	城館跡	中世	掘立柱建物 土坑 柱穴	1 3 104	中世陶器 近世陶磁器 石鏃 1 古銭(熙寧元寶) 1	(文化財認定箱数：2)		

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第156集

稲荷山館跡・堤屋敷遺跡発掘調査報告書

2006年3月28日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上市市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 株式会社 大風印刷
〒990-2338 山形県山形市蔵王松ヶ丘一丁目2番地6
電話 023-689-1111

